第１章

自然・歴史・地理的環境

第１節　自然的基盤

岡崎地域は京都盆地の北西に位置する。吉田山・黒谷から粟田山の間に広がる白川の扇状地にあって，東は東山が連なり，西には鴨川が流れる。白川は流路を変えながらいくつかの舌状扇状地を形成しているが，特に岡崎の扇状地は，平安時代には白河街区が形成されるとともに六勝寺の巨大寺院群が造営され，さらに近世には蔬菜栽培地として京の食文化を支えるなど，歴史を通じて京都を支えるヒンターランドの役割を果たしてきた。その土地利用を呼び寄せてきたものこそ，扇状地という岡崎のフィジオトープである。

白川が扇状地を形成してきた背景には，砂礫の供給地である「比叡平」の性質が深く関係している。「比叡平」とは，東山の内，比叡山から大文字山にかけての区間の名称であるが，この区間は花崗岩帯で風化が進みやすく，その結果，多くの砂礫が河川に流れて厚い扇状地が形成されてきた。つまり，扇状地という地形のみでなく，岡崎の扇状地を形成する地質岩石についても検討する必要がある。

そこで，本節では，京都盆地における岡崎地域の特質についてマクロな視点で述べた上で，岡崎地域及びその周辺地域に絞って検討した。さらに，東山の植生遷移と人々の活動との関係についても考察した。

１. 京都盆地における岡崎の位置

（１）　白川扇状地の地質的特性

京都盆地を流れる代表的な河川は，高野川，賀茂川，天神川，御室川などであり，西に最大の桂川がある。桂川は亀岡盆地で砂礫を手放してしまうため京都盆地には扇状地を発達させておらず，盆地北部の扇状地の大部分を形成してきたのが高野川などの北縁から流れる河川である。

この盆地北部の扇状地は複数の扇状地が複合・合成して成り立っているもので，詳しくみてみると，西から，有栖川扇状地，御室川扇状地，天神川扇状地，若狭川扇状地，賀茂川扇状地，高野扇状地川，鴨川扇状地，音羽川扇状地，白川扇状地に分類できる[1)]。これら各扇状地と土砂供給源である山地部の地質と照らし合わせてみると，西の有栖川扇状地から東の鴨川扇状地までを形成した土砂は，主に，砂岩や泥岩，チャートなどの堆積岩から成ることがわかる（図１）。一方，東山の麓に形成された音羽川扇状地と白川扇状地は，堆積岩ではなく，粗粒な火成岩である花崗岩に由来している。この花崗岩の一帯が比叡平である。そのため，白川扇状地の礫層は花崗岩由来の砂礫の割合が多くなり，また河川にも石英やカリ長石といった白っぽい鉱石由来の砂礫がたまった。「白川」という川の名前にも，比叡平の影をみてとることができるだろう。

つまり，京都盆地北部のほとんどの扇状地が堆積岩から成るのに対して，岡崎一帯は比叡平の花崗岩に由来する扇状地であることに相違の一端があるといえる。

図１　京都盆地周辺の表層地質図

（2）　花折断層帯が生んだ吉田山・黒谷と白川流路

京都盆地における岡崎の位置を考えるうえでもうひとつ欠かせない点は，京都市東縁を南北に大きく貫く構造線の存在である（図２）。

この構造線は，安曇川と和邇川の分水嶺である花折峠を通ることから「花折断層帯」と名付けられており，滋賀県高島市今津町の水坂峠あたりから京都盆地東縁を経て，京都府宇治市に至る。全体として長さは約 58km で，北北東から南南西方向に延びている。断層のずれの種類及び過去の活動時期から，断層帯北端から京都市左京区南部までは右横ずれを主体とする横ずれ断層であって，特に南部の比叡山・京都盆地東北部では東側が相対的に隆起していることがわかっている[2)]。

京都盆地を通る花折断層帯の主断層は，吉田山の南西麓まで地形的に明瞭に追跡される。京都大学農学部の試験農場や植物園には白川の旧扇状地面を切って比高約 2.1m の低断層崖が 700m ほど連続し，岡崎福ノ川町付近でも比高 2.6m の低断層崖が生じている。この地形的な配置やボーリング調査などから，岡崎北縁を限る吉田山（標高 121m）と黒谷（標高 98m）の小丘群は，右横ずれが卓越する花折断層帯の主断層南端部に形成された末端膨隆丘と推察されている[3)]。この隆起は

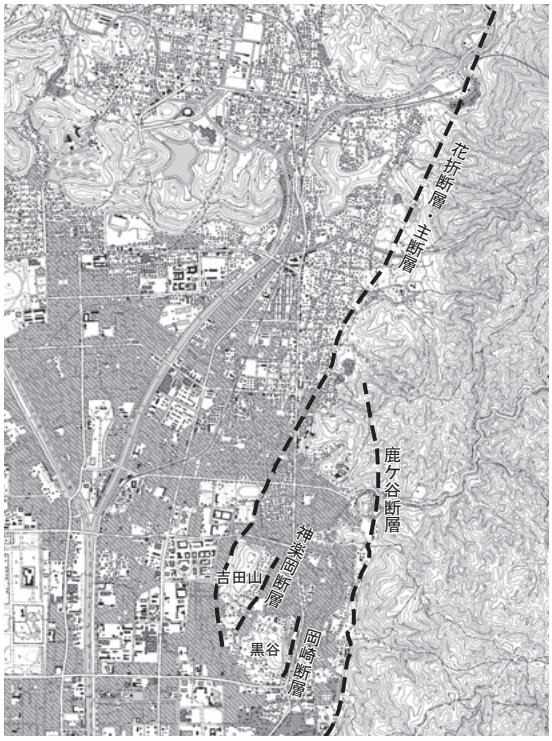


図２　花折断層

第四紀中期更新世（約 60 万年前）以降に生じたこと，花折断層帯の最も新しい活動が弥生時代中後期に発生したことも示されており，白川の現在の流路は比較的新しい時代に定まったといえる[4)]。

さらに，花折断層帯の副次的な活断層として，吉田山・黒谷の東側に沿って神楽岡断層と岡崎断層が，東山の山裾に沿って鹿ケ谷断層が推定されている。神楽岡断層は吉田山の東縁を限る長さ 700m の断層で，比高約 40m の東落ちの急崖を形成している。岡崎断層は黒谷と白川との間にあり，長さ 500m ほどで黒谷の東縁を限っている。鹿ケ谷断層は南北走向で約 3.5km あり，銀閣寺から法然院，永観堂，南禅寺などの直下を通過する。３断層とも主断層にほぼ並走しているが，鹿ケ谷断層が主断層と同じ東側隆起の特徴を持つのに対して，神楽岡・岡崎両断層は逆の西側隆起が認められている。その結果，鹿ケ谷断層と神楽岡・岡崎両断層との間に地溝が形成され，浄土寺から鹿ケ谷にかけての細長い谷状地形を流れる現在の白川の流路が決まったと考えられている。

つまり，白川の流れを規定してきた背景には，比較的新しい時代に吉田山と黒谷を隆起させつつ地溝を形成させた花折断層帯の存在があり，白川は断層のスキマを潜り抜けるように流れながら岡崎一帯に水と砂礫をもらたしてきたと捉えられる。

２. 岡崎地域周辺のフィジオトープ

（1）　比叡平の花崗岩

花折断層の東側の山地は，比叡山を境にして，北側の一段高い比叡山山地と南側の比叡平とに分けられる。比叡平は比叡山山地や南の如意ヶ岳山地に比べて一段低い山地としてひろがるが，これは先述のとおり，京都盆地周縁の山地の中で唯一この付近の地質が花崗岩帯で，その風化が進み形成された小起伏面であることによる。京都と大津と結ぶ山中越えがここを通過するのも，そうした地質的背景によるアクセスの容易さが理由にある。

京都盆地東縁の中でもひときわ際立つ存在である比叡山と大文字山も，この比叡平の花崗岩が作り出したといっても過言ではない。というのは，比叡山と大文字山付近は，丹波層群と呼ばれる堆

積岩からなる山地と，花崗岩からなる比叡平との境界にあたる。比叡平の花崗岩が母岩である丹波層群の砂岩に貫入する際，境界部が熱変成作用を受けて「ホルンフェルス」と呼ばれる風化しにくい硬い岩質となった。その後，風雨により花崗岩が分布する比叡平が浸食されたのに対して，硬いホルンフェルスでできた比叡山と大文字山は浸食されにくいため孤高の姿になって残された（図３・４）。これが現在の東山の山姿である。比叡山と大文字山が都の信仰対象となったのも，その淵源には比叡平の地層がある。

では，比叡平の花崗岩はなぜ浸食されてしまったのだろうか。花崗岩は石英やカリ長石といった白っぽい鉱石を多く含み，温度変化の影響を受けやすく，鉱物同士がばらばらの状態になってしまい，非常にもろく崩れやすい。さらに石英以外の鉱物は水や酸素の影響で風化が進み，結果，山地にガラス質の石英が多く残る。風化が進んだ山地からは，わずかな降水でも多量の土砂が流し出され，谷は浸食がすすむ。花崗岩の風化と編み状に発達した谷筋により稜線は徐々に低下し，比叡平と呼ばれる鞍部が形成されたのである。

ガラス質の石英が多く残る比叡平の表層土壌は有機物に乏しく，水をよく保つ細粒成分に乏しいため，バクテリアを主とする土壌微生物の発達は悪い。その結果，比叡平の貧栄養の土壌で育つことのできる植物は限られ，アカマツやコナラといった外菌根と共生できる樹種が優占することになった。近代に入り，欧米から導入された新たな自然観のもとで岡崎界隈に生まれた自然主義的な庭園は，借景としての東山とのつながりや土地の潜在的な植生とのつながりを重視した結果，庭園の内部にアカマツを多く利用することになったと考えられる。

（２）　白川が生み出した複合扇状地

比叡平から流れ出る白川により形成された白川扇状地は，北白川仕伏町の乗願院付近を扇頂とし，北白川，田中，吉田，岡崎，聖護院一帯に広がる。白川は流れを変えながらいくつかの扇状地を形成したため複合扇状地となっている（図５）。この形成史については石田他（1985）に詳しく記されている。それによると，白川は，始めは北白川に扇状地を形成したが，瓜生山沿いに旧扇状地との間を流れて，北白川東瀬ノ内町の上終児童公園から田中里ノ前町へ扇端をひろげた。これら３つの舌状微地形は南九州の姶良カルデラ噴出のAT 火山灰（約 22000 年前）を地表下２～３ｍにはさむことから，最終氷期にほぼその形がつくら

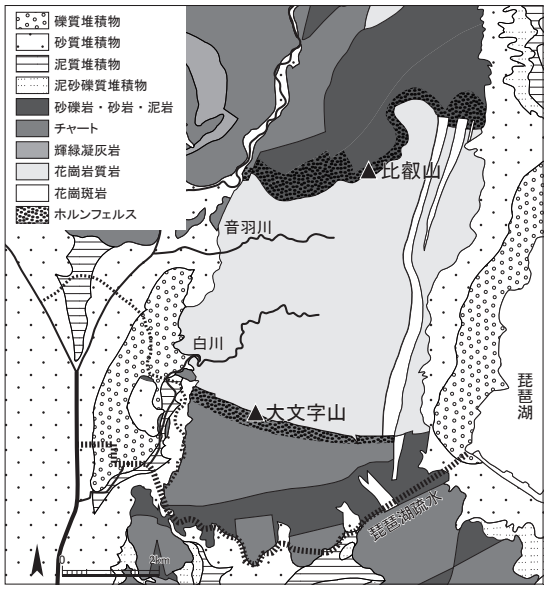


図３　花崗岩とホルンフェルスの分布

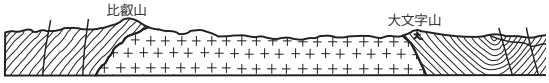


図４　比叡山から大文字山にかけての地質断面図

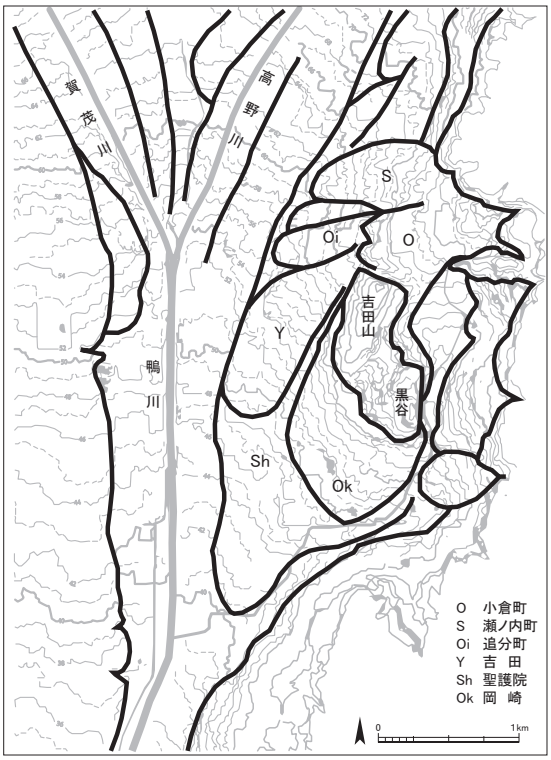


図５　白河扇状地

れていたことがわかっている。その後，白川は小倉町と瀬ノ内町の間を流れて，京都大学農学部グラウンドの北側から西へむかって細長い小扇状地をつくったり，吉田山の北端から京都大学本部のある吉田本町をへて医学部のある吉田橘町にのびる扇状地をつくったりした。最も新しい扇状地は，吉田と岡崎の扇状地の間を抜けて，聖護院に広がったものと考えられている。

白川の集水域は比叡平の花崗岩帯のほとんどの範囲といえ，集水域は山科盆地に匹敵する広さである。白川に比べて高野川のほうがはるかに流量は多いものの，比叡平から白川へ流れ出す大量の花崗岩系砂礫により高野川の流れを西へ移動させた。こうした扇状地の堆積物や花折断層帯の活動などの影響により，白川は流れを徐々に南に転じ，白川扇状地の中でも比較的新しい時代に岡崎一帯の扇状地が形成されたようである。

（3）　岡崎の水系と２つの地質

白川の左岸地域（南禅寺界隈）は，鹿ケ谷から流れる桜谷川のほか，その南側の熊野若神子神社，最勝院，日向大神宮，将軍塚などのある各谷からの小河川が流れる。どの谷もその集水域はチャートや泥岩といった堆積岩帯であり，その土砂が運ばれ，極めて小規模であるが急傾斜の扇状地が連なる複合扇状地が形成されている。この扇状地が白川の流れを西側に押しているため，断層崖である黒谷の東縁がさらに削られ急崖になっているのである。一方，白川右岸地域（岡崎公園界隈）は，前項の通り，白川扇状地の末端にあたり，比叡平からの花崗岩由来の砂礫が堆積した厚みのある扇状地となっている。

岡崎一帯はこの両者の扇状地同士が連結して鴨川方面へと傾くひとつの傾斜地を構成しているが，それぞれの扇状地の成因を考えると，白川左岸（南禅寺界隈）はチャートと泥岩に由来する土地，白川右岸（岡崎公園界隈）は花崗岩に由来する土地であるといえるだろう。

3. 東山の植生遷移とアカマツ林

（1）　マツ林の出現

こうした京都北東部のフィジオトープを基盤に，一帯の植生を考えてみたい。

まず，有史以前の状況については，京都市北区上賀茂深泥池町にある深泥池の花粉分析，及び，周辺地域における花粉分析結果との関係から，京都盆地における植生変遷の輪郭が明らかになりつつある[5)]。それらによると，最終氷期初期の約12万から７万年前には，スギやコウヤマキといった温帯性針葉樹が優占する森林が発達した。約３～１万年前はさらに寒冷化が進み，最終氷河期後期となるとマツ科の針葉樹が増加し始め，モミ

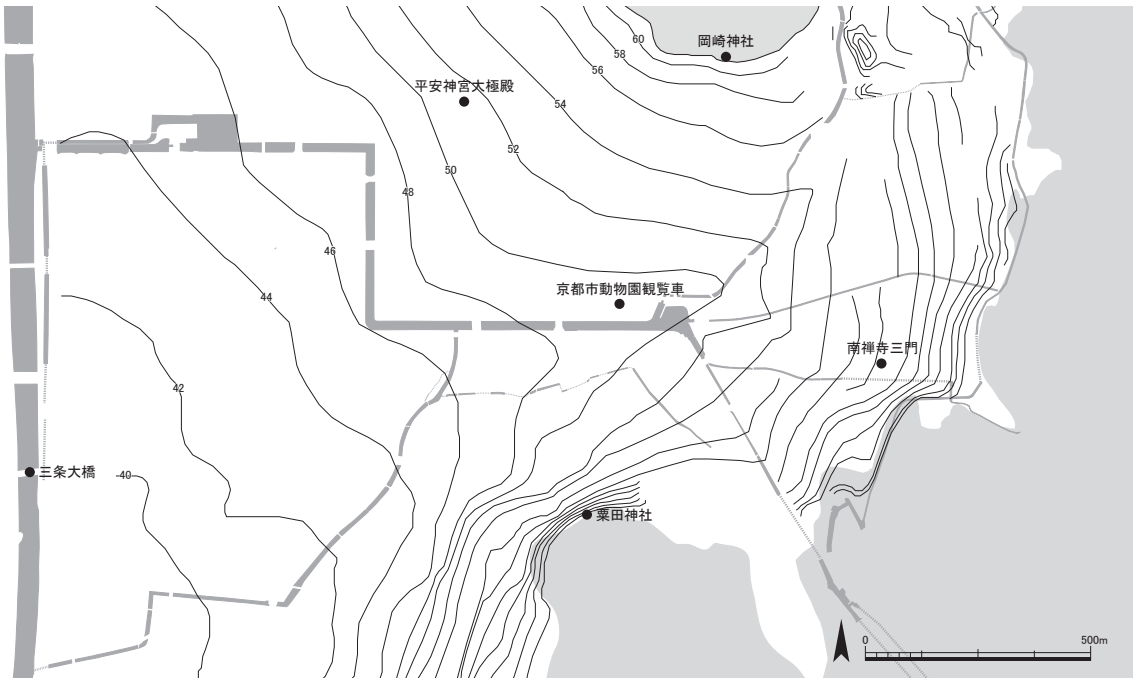


図６　岡崎の水系と原地形

属，ツガ属，トウヒ属，マツ属などが樹林を形成していた。この状態から，約 1.5 万年前からマツ科針葉樹が減少し始め，ブナを伴いながらもコナラ亜科が最も優勢になった。8000 ～ 6000 千年前になるとエノキ属，ムクノキ属といった暖温帯性落葉広葉樹が広がり，その後，照葉樹林へと遷移した。

歴史時代に入ると，前述の花粉分析が行われたほとんどの地点において，堆積物の上層部でマツ属花粉の増加が示されている。これは，人間活動が活発になりアカマツが増加したためと考えられている。京都盆地での発掘調査に伴う花粉分析[6)]によると，古墳時代にはアカガシ亜科やスギ属などからなる照葉樹林だったものが，都が造営されていく長岡京期から平安時代前期にかけてこれらは減少し，代わってマツ属が増加していることがわかっている。平安時代中期からはその傾向はさらに進み，マツ属が大部分を占める林相へと遷移していったようである。

小椋純一による室町時代以降に描かれた絵図類の一連の研究でも[7)]，アカマツが優勢する状況は続いていたが，中世･近世には人口増加と都市化，過度の森林利用により低木林（禿山）とアカマツ林が混在する状態だったと考えられている。

（２）　近代の乱伐と禁伐主義

明治維新が起こると，こうした状態は一変し始める。旧体制の瓦解とともに乱伐が横行し，官有民有を問わず森林が伐採された。植林されず禿山となった東山では，その結果，陽樹であり痩せ地に強いアカマツが純林のように生育した。明治 22 年（1889）の「京阪地方仮製２万分１地形図」からは，東山の大部分を樹高３m 以下のアカマツが占める極度に痩せたマツ林であったことがわかっている[8)]。ただし，銀閣寺や南禅寺，清水寺の裏山には５m 以上のマツを主体とする林が残されており，他の山林に比べて保護されていたようである。

乱伐によるアカマツ林の増加は全国的にみられた。東京帝国大学農科大学教授であった本多静六は，明治 33 年（1900）に「我国地方ノ衰弱ト赤松」という論文を発表し，地力の衰えに対して警鐘を鳴らしている[9)]。

森林の荒廃を止めるため，明治政府は明治 30 年（1897）に森林法を制定し，その重要な柱として保安林制度を導入した。東山の国有林全体はこの制定と同時に風致保安林に編入された。さらに，明治 43 年（1910）の「京都事業区追加施業説明書」において東山のほとんどが「禁伐林」に指定され，大正４年（1915）には保護林制度の創設により「保護林」としても守られることになった。

生活に必要な資材を生産するための人為的な撹乱をできるだけ避けた状態におかれた東山は，京都盆地から眺め，見守られる存在になり，アカマツ主体の林からゆっくりと自然植生へ遷移していった。こうした状況は全国の都市近郊でもみられ，学界を中心に禁伐主義に対する批判と郷土の森林風景を守るための施業の必要性が訴えられるようになる。特に東山と嵐山は詳しく取り上げられ，田村剛は，「今日京阪神付近の森林にして，この消極的保存のために却って風致を傷つけるものあり」[10)] と主張している。

（３）　風致保全を組み込んだ施業計画の立案

このような状況を反映し，昭和初期になると施業計画は大きく変化していった。

昭和４年（1929）に大阪営林局が作成した京都府内の国有林施業に関する「第三次検訂京都事業区施業案説明書」では，それまでの施業案説明書に比べて景観に関する記述の割合が非常に多くなり，さらに東山を取り上げ，アカマツ林が減少している状況を危惧し，アカマツが京都の景観にとって重要であることを強調している。この施業案には，「アカマツヲ除外スルコトハ望マシカラズ，社寺仏閣ノ屋根尖ツタ塔等ガアカマツノ緑乃至ハ赤イ幹ナドト映リ合フ處ニ京都ノ美ガアルモノト思料サレル」と，アカマツの緑色の葉と赤色の幹があることに京都の美の本質があるとまで記されている。

さらに，室戸台風による東山国有林への被害を受けて昭和 11 年（1936）に作成された「東山国有林風致計画書」ではさらに踏み込み，禁伐主義を誤った方向性だったとし，アカマツ，シイ，カシ等が混生し調和した林相を造るための詳細な調査が実施され，具体的な計画が描かれている。森林風致を重視した東山での計画立案は，同時期の「嵐山風致林施業計画書」（昭和８=1933 年作成）と並び全国でも最初の試みだったと考えられている。この背景には，昭和５年（1930）の東山を含む山並みの風致地区指定が大きく影響していたこ

とは言うまでもない。

昭和 30 年代から 40 年代かけての燃料革命と外国産材の台頭，また同時に起きたマツノザイセンチュウの流行により，アカマツ林は壊滅的な打撃を受けた。その結果，東山ではヒノキやスギが植林され，また潜在自然植生であるシイ林が増加した。現在もシイ林への遷移が進んでいるが，平成 15 年頃からは，カシノナガキクイムシによるシイやコナラの枯死も急速に拡大している。ただし，比叡平の花崗岩帯は土壌に栄養が乏しいので，丹波層群に比べて常緑高木が発達しにくく，比較的多くの種からなる落葉広葉樹の植生を残している。

（４）　花崗岩質の地質とアカマツ林，都との関係

東山のアカマツ林は，平安時代から長期にわたり維持されてきた。それは，東山の土壌が肥沃化することなく極端にやせた状態に保たれてきたということであり，岡崎を含めた周縁部の人々が都を支えるヒンターランドの一部として山を疲弊するまで利用し尽くしてきたということでもある。その中でも特に，比叡山から大文字山にかけての比叡平は栄養分に乏しく，潜在的にもアカマツ林が育ちやすい環境にあった。

近代に入ると，明治時代の禁伐主義，戦後の燃料革命や木材需要の低下などにより，東山は「使う山」から「眺める山」へとその主な用途を変化させた。それは，水運や水車動力など多様な目的のために徹底的に使われてきた琵琶湖疏水が，京都の潤いあるオープンスペースとして貴重な自然空間を形成する河川へと変化したことと同じ流れの中にある。

東山に人の手が入らなくなったりマツ枯れが進んだりしたことでシイ林へ遷移していることは自然の変化であり，純粋な自然環境として問題があるということでは決してない。ただし，シイが卓越した林では構成する樹種は少なくなり，単純な林相になる。そうなると，野鳥が好む液果樹木は少なくなり，しかもヤマザクラやカエデといった京都の四季の文化を支える要素も減少する。

東山一帯は歴史を通じて京都を支える重要なヒンターランドの一部であり，その文化の基盤であり続けてきた。文化的景観という観点から考えると，これからもその関係が逆行することなく，持続的に保たれることが望まれる。　（惠谷　浩子）

註

1）石田志朗「京都盆地北部の扇状地」『古代文化』34（12），1982 年，571 ～ 584 頁。

2）地震調査研究推進本部地震調査委員会『三方・花折断層帯の長期評価について』2003 年。岡田篤正「花折断層南部における諸性質と吉田山周辺の地形発達」『歴史都市防災論文集』１，2007 年，37 ～ 44 頁。

3）吉岡敏和「花折断層の変位地形」『地理学評論』59, 1986 年，191 ～ 204 頁。前掲註２岡田文献。

4）吉田山は風化を受けた大阪層群（大阪平野・京都盆地・奈良盆地などの丘陵をつくる第三紀末～第四紀中期の地層）上部の砂礫層から構成されており，隆起が第四紀中期更新世（約 60 万年前）以降に生じたと推定されていることなどから，花折断層南端部での右横ずれ運動は比較的新しい時代に発生した可能性が高い。また，今出川通におけるトレンチ調査では，花折断層が縄文時代後期の腐植土の地層を切って活動したことが確認されている。石田（1967）は，北白川上終町の白川通で縄文時代晩期の地層を切って古墳時代後期の地層に覆われる断層運動を報告している。また，白河廃寺跡では８世紀初頭を上限とする噴砂が，京都大学理学部構内では弥生時代前期を下限とする噴砂が発見されている。これらは花折断層の最も新しい活動が弥生時代中後期に発生したことを示唆し，黒谷も吉田山同様に第四紀中期更新世以降に形成された可能性が高いとみられている。

5）深泥池団体研究グループ「深泥池の研究（２）」『地球科学』30，1976 年，122 ～ 140 頁。中堀謙二「深泥池の花粉分析」『深泥池の自然と人　深泥池学術調査報告書』京都市文化観光局，1981 年，163 ～ 180 頁。高原光・竹岡政治「京都市八丁平湿原における最終氷期最盛期以降の植生変遷」『日本生態学会会誌』36，1986 年，105 ～ 116 頁。高原光・植村善博・壇原徹・竹村恵二・西田史朗「丹後半島大フケ湿原周辺における最終氷期以降における植生変遷」『日本花粉学会会誌』45，1999 年，115 ～ 129 頁　等。

6）パリノ・サーベイ株式会社「平安京右京五条二坊九・十六町発掘調査　花粉・植物珪酸体分析報告」『平安京右京五条二坊九町・十六町：京都市右京区西院三蔵町』（京都文化博物館調査研究報告７）1991 年，108 ～ 116 頁。パリノ・サーベイ株式会社「花粉分析」『宮ノ口遺跡：京都府綴喜郡田辺町』（京都文化博物館調査研究報告 10）1993 年，63 ～ 72 頁。

7）小椋純一「絵画資料の考察からみた文化年間における京都周辺山地の植生」『造園雑誌』52（５），1989 年，37 ～ 42 頁。小椋純一「「華洛一覧図」の考察を中心にみた文化年間における京都周辺山地の植生景観」『造園雑誌』53（５），1990 年，37 ～ 42 頁。小椋純一「室町後期における京都近郊山地の植生景観」『木野評論』21, 1990 年，109 ～ 125 頁。小椋純一「応挙図の考察からみた江戸中期における京都近郊山地の植生景観」『造園雑誌』54（５），1991 年，42 ～ 47 頁。小椋純一「強烈な人間活動の圧力と森林の衰退－室町後期から江戸時代－」『事の森を活かす　モデルフォレスト京都』2008 年，47 ～ 72 頁。

8）小椋純一「明治中期における京阪神地方の里山の景観」『京

都精華大学紀要』３, 1992 年, 157 ～ 181 頁。小椋純一「明治中期における琵琶湖疎水沿線の植生景観」『京都精華大学紀要』10，1996 年，127 ～ 152 頁。小椋純一「明治中期における京都府南部の里山の植生景観」『京都府レッドデータブック』下，2002 年，354 ～ 371 頁。

9）本多静六「我国地方ノ衰弱ト赤松」『東洋學藝雑誌』1900 年。

10）田村剛「都市風景と天然風景」『都市公論』13（７）, 1930 年。

参考文献

1．岡田篤正（2007）「花折断層南部における諸性質と吉田山周辺の地形発達」『歴史都市防災論文集』１，37 ～ 44 頁

2．植村善博（2004）「変位地形と地下構造からみた京都盆地の活断層」『京都歴史災害研究』２, 7 ～ 28 頁

3．石田志朗（1967）「京都市北白川上終町の衝上断層でずれている腐植の絶対年代」『地球科学』21，39 ～ 40 頁

4．石田志朗・竹村恵二（1985）「北白川追分町遺跡の堆積環境の変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ－北白川追分町縄文遺跡の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター，189 ～ 192 頁

5．小椋純一（1992）『地図から読み解く人と景観の歴史』雄山閣出版

6．中嶋節子（2006）「管理された東山：近代の景観意識と森林施業」『東山／京都風景論』昭和堂，127 ～ 153 頁

7．中嶋節子（1994）「昭和初期における京都の景観保全思想と森林施業：京都の都市景観と山林に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』459，185 ～ 193 頁

8．村上幸一郎（2008）「室戸台風被害から復旧，そして新たな構想へ：東山国有林風致計画書（昭和 11 年）とその後の展開」『古都の森を活かす　モデルフォレスト京都』京都大学学術出版会，87 ～ 102 頁

第２節　土地利用変遷

１.郊外の成立：平安時代まで

岡崎は京都盆地の東北部にあたり，東は東山山系，西は鴨川，北は神楽岡（吉田山）によって，それぞれ限られている。平地部の東部は東山と神楽岡の間を南流してくる白川によって形成された扇状地，西部は鴨川左岸の沖積地となっている。白川については，神楽岡（吉田山）の北側で弥生前期の大規模な土石流が確認されており，その活動によって地形が平準化したこと，そして，その後の花折断層の活動によって断層崖が生じたことなどによって，現行のような東山西麓に沿う流路に固定されたことが指摘されている[1)]。

岡崎は弥生時代～古墳時代の遺物・遺構が検出される遺跡地である（「岡崎遺跡」）。発掘調査においても，弥生～古墳時代にかけての北東―西南方向の自然流路が数多く検出されており，平安時代前期まではその流路跡の起伏が凹地として残存していたことが分かっている[2)]。また，遺構としては，弥生時代の方形周溝墓[3)]や，周溝をそなえた古墳時代後期の古墳[4)]が知られている。建物遺構については古墳時代の竪穴住居２棟程度しかなく[5)]，集落そのものは未発見であるが，遺構や遺物の状況から付近に集落があったことが推測されており，この頃に岡崎が生活空間となっていたことは間違いないようである。

なお，上記に示した古墳は平安時代中期までは周溝に水が滞留した状態で存在し，その後，溝は埋められたものの古墳自体は「鵺塚」と呼ばれ，昭和 30 年（1955）まで残存していた。

794 年に平安京遷都がなされたことで，岡崎は都市近郊という性格を帯びることになった。ただし，地理的な意味での郊外の誕生はともかくとして，平安前期の遺物・遺構はほとんど検出されておらず[6)]，平安京が建設された当初においては，その影響はいまだ限定的であった。そのなかにあって，都から東へ向かう官道（東海道･東山道･北陸道）が粟田口を通過して山科盆地に抜ける道として設定されたことは，岡崎に大きな影響を与え，流通・往来の中心に接する地域としての性格を帯びることになった。この特徴は現在においてもつづいている。

平安京内部の利用が次第に左京を中心に展開するようになるに従い，東側の郊外にあたる鴨川周辺――当時，白河と呼ばれたエリア――は，都市的空間に取り込まれていくようになる。この時期の様相を全体的かつ詳細にとらえた上島享による近年の研究成果によれば[7)]，白河における貴族の邸宅の存在を確認できる初見は貞観 14 年（872）であり，10 世紀には藤原北家嫡流による白河殿の伝領なども確認できるほか，その他の貴族も山荘を所持していたという。この頃の白河はいくつかの邸宅が散在しているような景観であったといえるだろう。

２.宗教都市化：平安時代後期

このような状況が大きく展開したのは藤原頼通（992 ～ 1074）期である。頼通は道長より受け継いだ白河殿を寝殿造に修築し，たびたび宿泊するようになった。この時期には「白河別業」という表記も使用されるになるが，まさに別業と呼ぶにふさわしい邸宅としての機能が付与された。後には上東門院彰子が御所として利用している。

摂関家を中心に開発が進められた白河の地であったが，承保元年（1074），藤原師実によって別業が白河天皇に献上された頃から新たな展開を迎える。白河天皇は，その地に法勝寺を建立し，承暦元年（1077）には落慶供養がなされた。６年後には金堂前面の園池内中島に八角九重塔が完成し，その後も整備が重ねられた結果，園池式の伽藍を持つ壮大な寺院となった。

法勝寺の建立以降，尊勝寺や白河南殿，白河泉殿，最勝寺といった別荘・寺院が相次いで建立されていき，また平安京とおなじような整然とした街区―白河街区―が整備されていくことで，白河は都市的景観を備える場へと変貌していった（図７）。白河扇状地に位置するこの地区は東に向かっ

て緩やかな坂となる微地形であるが，法勝寺は白河街区の東端，すなわちもっとも高い位置にある[8)]。そこに建てられた八角九重塔は，まさにランドマークとして機能しただろう。上島は「高台に位置する法勝寺を中核とした＜宗教都市＞」と評しているが[9)]，まさにこの時期の白河は都市と呼ぶにふさわしい景観を呈していたのである。

郊外における動向を京都の衛星都市の展開としてとらえる山田は，院政期のもっとも重要な都市のひとつに白河を挙げ，院政王権によって築かれた「院政王権都市」[10)]と呼んでいる。先に触れたように，少なくとも白河は摂関期には使用がなされており，院政王権によって完成されたとすべきではあるが，いずれにしても，この両地区が極めて重要な都市であったことは首肯しうる。

また，この両地区の立地点について，「どちらも平安京の玄関口ともいうべき地であったことも重要である」[11)]という山田の指摘は，見逃すべきではない。白河は京都と東国を結ぶ交通路（東山道・東海道）の京都盆地への出入り口部分に近接しており，重要な交通の要衝であった。白河を行き来する者は京都との往来に限らず，遠国と往来した者たちでもあったのであり，そのような地点に院政王権の権力を誇示するかのような高層建築を林立させた「宗教都市」を現出させたのである。

なお，平成６年の平安遷都1200年を記念して造られた平安京模型に，その景観が視覚的に復原されている[12)]（図８）。それ以降，白河街区については発掘成果が数多く出されており，復原の細部は修正すべき点もあるが，スケール感等も含めておおよその景観を立体的に想像する道具としては，依然として一定の効果をもっている。

3. 農村化：平安末期～室町時代

しかし，この「宗教都市」が永続的に都市的景観を保つことはなかった。図８内で名称が付されている建物のうち，最後に創建されたのは近衛天皇（1139 ～ 1155）御願による延勝寺であり，久安５年（1149）に落慶供養が行われた。しかし，近衛天皇崩御にともなう皇位継承などをめぐって保元元年（1156）に起こった保元の乱では，白河界隈はその主な舞台となり，白河北殿などが焼失するなど，景観上，大きな影響があった。すなわち，仮に図８のような「立派な」景観が実態として存在したと仮定したとしても，それはわずかな期間であったことになる。

その後，修復や新たな堂宇の建立もあったが，火災や地震によって，白河にあった諸施設は次第に衰亡していく。なかでも元暦２年（1185）７月９日に起こった地震は，京都にきわめて甚大な被害をもたらしたようである。この地震を語る史料は数多く残されているが[13)]，その中には白河の状況を伝える記事がいくつも確認でき[14)]，法勝寺九重塔をはじめとする白河の諸施設が大きなダメージを受けたことがうかがえる。発掘調査によれば，この頃以降，13世紀から14世紀前半にかけて，この地域の居住の痕跡が極端に減少し，14世紀後半になると生活痕跡は消失し，一帯は耕作地へ

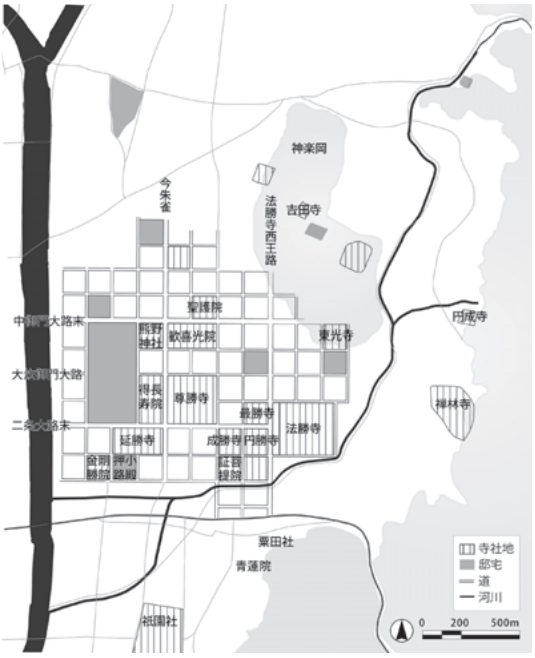


図７　院政期復元図

図８　復元模型の写真

と変化していくという[15]。承安５年（1175）創建とされる黒谷（金戒光明寺）や，正応４年（1291）に後嵯峨天皇造営の禅林寺殿を亀山法王が寺院とした禅林禅寺（南禅寺）など，白河周辺の山麓に建立された寺院はその後も法灯をつなげていくが，自然災害や政治情勢の変化によって，平地部については農村化が進み，都市近郊に位置する近郊農業地帯へと変化していくのである。

応仁・文明の乱による六勝寺の廃絶はこのような農村化過程の「仕上げ」の段階であったと位置付けることができる。また，応仁・文明の乱は，都市や村の景観にも変化を与えるきっかけとなった。京都の上京・下京の町衆たちは戦乱から自分たちを守るために，それぞれに巨大な堀と土塁をめぐらして自衛するようになり，また，京外にあっても，洛中洛外図屏風（歴博甲本）の描写にみえるような，村の入り口に門を構え，また周囲を塀などで囲む惣構集落が展開するようになっていった。すなわち，都市も村落も明確な境界線を保持するようになったのであり，都市と郊外，そして集落と田畑との景観上の境界がこれまでになく明確になったのである。岡崎に関して言えば，黒谷や南禅寺といった山麓寺院はあったが，平地部の都市的要素は完全に廃され，コントラストが明瞭な田畑と惣構集落という景観が現出したことになる。

このような囲郭された村落や都市は，戦国時代を通じて次第に武士によって制圧され，いわば武装解除がなされるなかで塀や堀が撤去・埋設されていった。ただし，京都については秀吉が新たに全長 23km にも渡る御土居を京都の周囲にもうけたために，あらたな囲郭都市として生まれ変わった。御土居は「京都」の内外を明確にする装置ともなり，御土居の内側が洛中，外側が洛外であるという認識が広く広まっていくことになる。当然，岡崎も洛外として，京都の外側に位置づけられることになった。

４. 近郊農業と鴨東文化村：江戸時代

江戸時代に入り，京都の都市活動が盛んになっていく過程で御土居はその一部が破壊されたが，洛中洛外の観念的な境界線として機能し続けた。御土居の破壊はとりわけ京都の東部で著しかったが，それでも鴨川が次なる自然障壁としてあり，洛中洛外の境界は基本的には御土居もしくは鴨川が果たしていた。

江戸時代の京都は幕府直轄地であり，京都町奉行所が管轄していた。それ以外の農村部は個別の領主支配―ただし，大部分は複数の領主がいる相給村―であった。政治体制から見るならば，京都町奉行所管轄の範囲を都市域，それ以外を農村域とみることができる。ただ，ここでいう都市域は「洛中」と一致するわけではなく，京都町奉行は洛外の一部についても管轄していたことが知られ，その範囲は「洛中洛外町続」と呼ばれている。

鴨川東部については，二条付近に寛文 13 年（1673）に頂妙寺が内裏付近から移転してきていたが，宝永５年（1708）に起こった宝永の大火によって焼失した内裏再建にともなう内裏・公家町域の再開発の一環として町人が頂妙寺周辺に移住させられ，新たに町人地となった。これらは洛外に移ったものの引き続き町奉行による支配地（上古京下一条組〔枝町〕川東十一町組）とされた。また，南側で接する地域は東海道沿いに形成された集落で，蹴上付近まで洛中から連続して町場景観が続いていた。そのため蹴上までの三条・東海道沿いの地域については，町奉行支配（雑色荻野家方）とされたのである。

一方，院政期に白河と呼ばれていた地域は，江戸時代には岡崎村や聖護院村となっていた。これらの村は，洛中からあふれ出た町場のすぐ背後に位置する農村として位置づけることができる（図９）[16]。安永９年（1780）刊行の『都名所図会』や，天明７年（1787）刊行の『拾遺都名所図』に掲載された挿絵によれば，当時の岡崎は藁葺きの家屋の周囲には田畑が広がり，その背景には疎林の東山が横たわる景観であった[17]。

このうち，田畑部分についてみれば，先に触れたように，京都という大都市に農産物を供給する，一大近郊農業地帯として位置づけることがで

きる。黒川道祐（1623 ～ 1691）が著し，貞享３年（1686）に刊行された『雍州府志』には当時の土産，すなわち土地の名産が産物ごとに記されているが，試みにその農産物の欄を繰っていくと，次のような記述をみることができる。

> 茄子：「洛東河原の産、殊に絶れりとす」
> 角豆：「東河原の産、佳なりとす。」
> 蘿蔔根：「洛外西山の蕪菁、東山の大根、これを一双の珍味とす……東山吉田辺、土地、砂多くして、和柔なり。故に、大根、土に入ること深くして、自然に長大なり。その味ひ、佳なりとす。」

「蘿蔔根」には砂地という土地条件のために大根の生育に適していると記されている。ここからは，白河扇状地ないし鴨川氾濫原という表層地質の特徴を利用して産物が選択されていたことが分かる。このような自然環境を活かした農業の展開のなかで次第に形成されていったのが「地域ブランド」としての特産品である。現在では「京野菜」として知られているものが該当するだろう。京野菜という総称自体にそれほど古い歴史はないが，個々の産品については，江戸時代に端を発するものも多い。

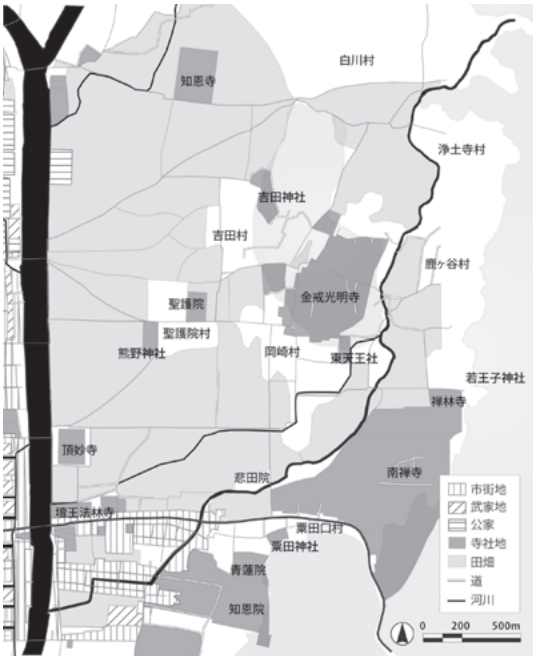


図９　元禄期復元図

なかでも，「聖護院」の名を冠する京野菜は，聖護院蕪菁，聖護院大根があり，また以前は聖護院胡瓜もあったことが知られている。これらの起源を追究した高嶋四郎の研究によれば[18]，聖護院蕪菁が成立したのは享保年間（1716 ～ 1736），聖護院大根は文政年間（1818 ～ 1830），そして聖護院胡瓜は天保年間（1830 ～ 1843）以前と，いずれも江戸時代の中～後期にかけて登場してきた産品となっている。

一方，集落部分については在地住民のほか，「凡て岡崎は中古以来隠人逸士の棲家多し」[19] と評されたように，文人たちの隠棲地として展開した。表１は『平安人物志』や『京都坊目誌』の記述などをもとに，岡崎・南禅寺・聖護院の文人居住者を一覧にしたものである。この表がすべての人物を網羅しているわけではないだろう。しかし，それでも江戸時代を通じて多くの者たちが岡崎周辺の地を求めてやってきていたことがわかる。

たとえば，18 世紀末に岡崎に居住した小澤蘆庵（1723 ～ 1801）の庵を本居宣長（1730 ～ 1801）が寛政５年（1793）に訪ねた際，宣長は蘆庵宅を「此いほり南の方にむかひて東山の見わたされたるいとけしきよし」と評している[20]。「いとけしきよし」という景観を求めて文人が居住し，そしてその文人との交友を求めてさらに多くの文人が集まる。このような文化的土壌が岡崎周辺には培われていた。

この営為は，摂関期や院政期の別業建立に通じる点でもあろうが，江戸時代においては院政期のような都市形成へと向かったのではなく，洛外への隠棲という形で展開した。『京都の歴史　７』[21] にはこのような状況を次のように解説しているが，実に的確な意見である。

> まさしく「かぐら岡崎」の地は、文人墨客が静かに住みなした地にほかならなかったのである。
> もともとこの辺りは、近世初期から文人たちの住居するところであったが、まさしく鴨東の文化村である。

５.軍事都市の相貌：幕末期

よく知られたように，近代の岡崎地区は琵琶湖疏水開削や博覧会開催といった諸事業に伴って都市的な景観となる。しかし，江戸時代の農村景観から明治時代の都市景観へという短絡的な理解は適切ではない。江戸から明治への過渡期に，岡崎地区は時代のパルスを受け取るかたちで，きわめて短期間ながら，極端な変化を体験することになったからである。

長らく政治の中心地としての機能を喪失していた京都であったが，幕末に至り，にわかに重要地として再浮上することになった。その決定打は文久３年（1863）３月の14代将軍家茂の上洛だったが，それ以前にも，たとえば文久２年（1862）12月には京都守護職となった会津藩松平容保が京都入りし，黒谷に本陣を構えるなど，京都はきわめてあわただしい状況となっていた。そして，幕府側もしくは朝廷側の命令・要請にもとづき，また政治情勢を見極めるため，諸藩が京都に人員を派遣し，なかでも京都警護の任にあたった藩は多くの兵を引き連れて上洛した。

このようななかで，問題となったのが京屋敷である。それまではすべての藩が京都に屋敷を構えていたわけではなく，またたとえ屋敷があったとしても，ごくわずかの人数の者が駐留することが想定された規模のものでしかなかった。そのため，特に兵を引き連れて上洛した藩は，兵の駐屯ないし調練の確保が必要となったのだが，たとえば金沢藩は建仁寺の境内を借りうけるなど，すでに広いスペースを持つ寺社地の境内等をまず確保していった。ただ，それだけでは十分な駐屯地を賄うことはできず，洛外に広がる農地スペースに駐屯地的役割を持つ京屋敷を急造していく。その主要な地区の一つが岡崎であった。岡崎は十分な空閑地が展開するのみならず，御所や二条城，また市街地中心部にも近く，そして東海道筋にも近接した場所として，軍事的側面においても重要な地点であり，各藩がこぞって新たに京屋敷を構えていった。

図10には，幕末に岡崎が農村景観から軍事地区的な景観へと変貌した様子がよく表れている。ただし，この図には岡崎地区のすべての京屋敷が掲載されているわけではない。明治３年（180）段階で各藩から京都府に京屋敷の状況を提出した文書をまとめた「諸藩邸上地件」[22]によれば，たとえば長尾藩は「河東丸太町大黒屋源四郎方借宅」，犬山藩は「岡崎村邸地」といったように，多くの藩が岡崎周辺に京屋敷を所有していたことが明らかになる[23]。

表１　岡崎周辺居住文人一覧

文人	生没	職業等	場所：家・墓	期間
藤村庸軒	1613～1699	茶人	岡崎（字黒谷）：家・墓	
京極高廣	1599～1677	元藩主・茶人	南禅寺（字福地）：家・墓	1666～1677
久須美疎庵	1636～1728	茶人	岡崎：家	
石川自安		茶人	岡崎：家	
土肥二三	1639～1732	茶人	岡崎（字黒谷）：家・墓	1690～1732
小澤蘆庵	1723～1801	歌人	岡崎（字宮ノ脇）：家	1792～1801
香川景樹	1768～1843	歌人	岡崎（字福の川）：家	1804～1843
中島棕隠	1779～1855	儒者・漢詩人	聖護院：家 岡崎（字黒谷）：墓	
上田秋成	1734～1809	歌人	南禅寺（字仮山）：家・墓	1793頃～（南禅寺） 1806～1809（南禅寺）
世継寂弱	1773～1843	文雅家	岡崎：別邸（居然亭）	寛政年間～（明治末に中井氏の所有に）
梁川星巌	1789～1858	漢詩人	聖護院（川端丸太町上る）：家	1846～1858
太田垣蓮月	1791～1875	歌人	「かぐら岡崎」：家 聖護院：家	天保３年～（かぐら岡崎）， 嘉永～文久（聖護院）
十一屋伝兵衛		商人・鉄斎父	「かぐら岡崎」ちかく：別邸	
富岡鉄斎	1837～1924	南画家	聖護院：家	文久～1881
高畠式部	1785～1881	歌人	聖護院：家	文久～
税所敦子	1825～1900	歌人	聖護院：家	文久～
中島華陽	1812～1877	画家	聖護院：家	文久～
貫名海屋	1778～1863	書家	聖護院：家	文久～
小田海僊	1785～1862	南画家	聖護院：家	文久～

『平安人物志』・『京都坊目誌』・『京都の歴史』による

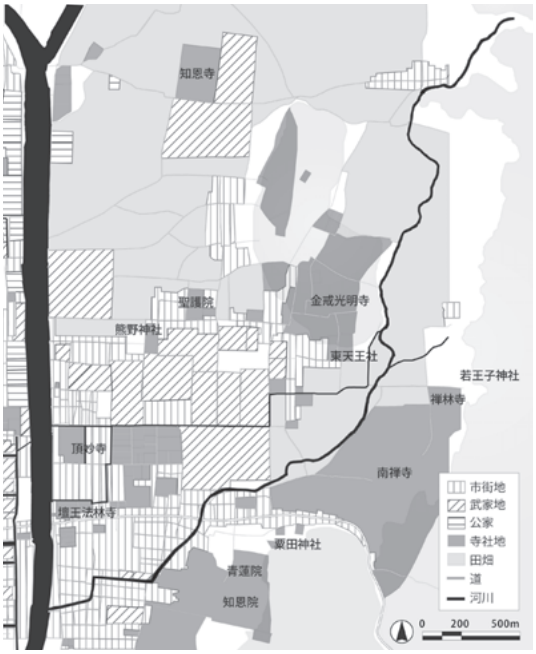


図 10　慶長期復元図

ただし，このような時代背景に全面的に依拠した都市景観であったがゆえに，その後の時代の変化にも敏感であった。明治維新を迎え，東京が政治の中心地として再設定されると，京都の持つ政治的重要性は著しく低下した。『京都坊目誌』には聖護院村に南部・阿波・越前・彦根の各藩が，岡崎村には「諸藩」が文久～慶応年間に「藩邸」を構えたことが示されているが，「一時大建築ありしが。明治之を廃し。皆民有に帰し。再び耕地を見る」[24]（聖護院），「諸侯争て藩邸を設け。耕地僅かに其間に連る。明治初年藩邸を廃し。再び耕耘の地と為る」[25]（岡崎）と説明されている。岡崎は幕末～明治最初期の 10 年ほどの間に農村から都市へ，そして農村へという劇的な景観上の変化を遂げたのである。

さらに，その後岡崎は琵琶湖疏水の開設と平安京遷都千百年を記念した各種施設を契機として三度目の都市化を経験し，その姿が現在の景観に色濃く表れている。この点については次項以降にゆだねたい。　（上杉　和央）

6. 琵琶湖疏水と第４回内国勧業博覧会：明治時代前半

幕末の動乱期を経て，明治維新を迎えた岡崎村は，各藩の京屋敷が撤去されて再び農村化した。東の南禅寺境内では，幕府の庇護を失うことで本寺と塔頭が衰退し，そこに寺領の上知と塔頭の統廃合が進められた[26]。まず，明治４年（1871）の寺社領上知令で現境内地を除く寺領が上知された。そして，翌５年（1872）の無檀無住寺院の廃止処分の太政官布告，明治 11 年（1878）の合寺令等により，塔頭 25 院のうち 17 院が順次統廃合された。南禅寺境内地及び塔頭の多くがこうして空地化していった。岡崎一帯は，近世以上に広大な農村と化したのだった。

一面の農村風景へと戻った岡崎の景観は，明治 23 年（1890）の琵琶湖疏水の建設により，再び大きく変貌を遂げる[27]。疏水の建設は，土地形状の改変をともなうものであることに加え，沿線の土地利用に大きな変化をもたらした。明治 16 年（1883）11 月に北垣国道知事が提出した琵琶湖疏水の起工趣意書には，建設目的として，①製造機械，②運輸，③田畑の灌漑，④精米水車，⑤防火，⑥井泉（上水），⑦衛生（下水）の７つの項目が挙げられている。これらのうち岡崎一帯の土地利用に直接的な関係を有したのが，①と④の水力利用と②の舟運である。

疏水の路線は，当初計画では現在の分線に当たる蹴上から北上し，北白川，下鴨を通って小山へ抜け，御所用水へと接続するルートが提案された。明治 20 年（1887）６月に，蹴上で分岐し，当初計画路線を分線とし，新たにインクラインを経て鴨川へと流す本線が設けられることとなった。両線の主目的として，本線は運輸すなわち舟運，分線は水車動力による機械運転と田畑の灌漑とされた。

疏水本線のルートは，蹴上から鴨川へと一直線に通すのではなく，矩形に２度曲折し，夷川に船溜を設けて鴨川へ落とす形とされた。このルート設定については，北垣知事の鴨東開発構想との関連が指摘されてきたが，より具体的には蹴上と鴨川の間の高低差の緩和と用地買収の容易さにより選択されたものであることが指摘されている[28]。

分線沿いでは，後に別荘地として開発されていく南禅寺北側の鹿ヶ谷に至る一帯が，疏水分線と白川の落差を利用した水車動力による工場予定地として計画された[29]。現在別荘が点在し，疏水沿いも哲学の道として良好な景観を保つこの地も，当初は工場地として開発される計画であった。こ

の計画は，明治 23 年（1890）の疏水竣工を前に土木技師田邊朔郎らがアメリカにおける水力利用を視察し，疏水の利用目的に水力発電が加えられたことにより変更された。水車動力による機械運転の必要性が薄まったため，南禅寺北側の工場地開発は白紙に戻されたのである。このことが，後の南禅寺旧境内地の別荘地開発の前提条件となっていく。

竣工後，疏水は当初の７つの目的と水力発電に積極利用された。これらのうち，今日では見られなくなったものとして，舟運及び観光舟，そして後には夷川船溜での踏水会による水練といった，疏水敷内に人が入る水利用を挙げておかねばならない。とりわけ岡崎一帯では，人と疏水との距離が近く，いわば親水的な水利用がなされることで，独特の景観が造り出されてきた。

疏水開削により大きな土地改変がなされた岡崎の地は，次いで平安遷都千百年紀念祭と第４回内国勧業博覧会誘致の舞台となる。紀念祭開催と内国勧業博覧会誘致の運動は，京都の実業家を中心に進められる中で一体の運動として位置付けられていった[30]。博覧会は明治 25 年（1892）に岡崎で開催することが決定され，次いで紀念祭も同時開催されることとなり，その会場設定が議論された。紀念祭会場は，御苑内か博覧会場周辺かで議論され，さらに平安宮大極殿跡案も出された

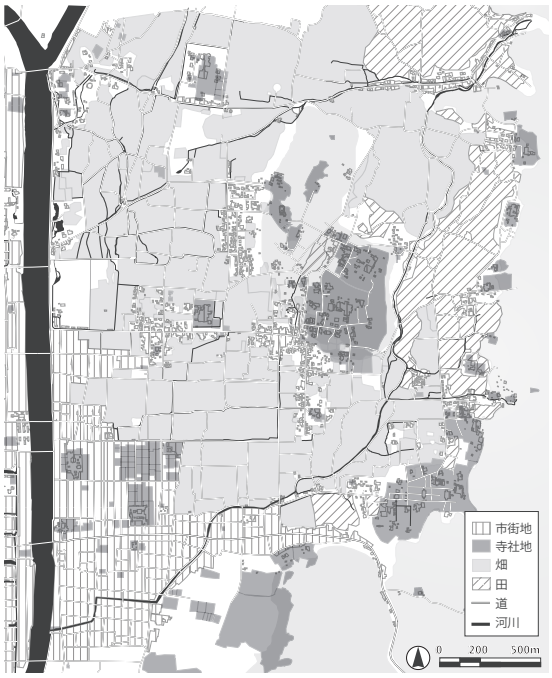


図 11　明治期復元図（明治 16 ＝ 1883 年）

が，明治 26 年（1893）５月に平安遷都千百年紀念祭協賛会において模造大極殿の建築を正式決定し，その敷地を博覧会場隣接地とすることとなった[31]。模造大極殿は，当初，博覧会場５号敷地，現在の動物園敷地が充てられ，東山を背景に西面する配置で計画された。その後，南面案が優位となり，現在の敷地に変更された。建設中の明治 27 年（1894）７月，大極殿を拝殿として背後に本殿を加えて平安神宮とし，官幣大社に列することとなった。こうして，明治 28 年（1895），岡崎を会場に平安遷都千百年紀念祭及び第４回内国勧業博覧会が開催された。

以降，この地では京都博覧会協会主催の博覧会が継続的に開催され，祝祭空間としての性格を帯びることになる。御苑で開催されてきた同協会主催の博覧会は，明治 30 年（1897）以降，会場を岡崎に移して毎年開催されていった[32]。博覧会場として，明治 43 年（1910）までは内国勧業博覧会のメインパヴィリオンを払い下げた博覧会館が，大正３年（1914）からは新築された京都市勧業館が充てられた。第４回内国勧業博覧会に次ぐ規模で開催された大博覧会として，大正天皇即位を記念した大正４年（1915）の大典記念京都博覧会，大正 13 年（1924）の万国博参加五十年記念博覧会，昭和天皇即位を記念した昭和３年（1928）の大礼記念京都大博覧会が挙げられる。

博覧会の継続開催により，岡崎公園周辺には勧業と関連を持つ商店や製造業が移転してきた。漆器製造販売の象彦がその代表例である。疏水の舟運を原材料の運搬に活かすとともに，博覧会の訪問客に対するショーウィンドウとしての役割が期待された。

こうして明治以降の岡崎は，近代京都の都市像を発信する祝祭空間となった。

７. 南禅寺別邸群と文教施設群の形成：明治時代後半～昭和戦前期

平安遷都千百年紀念祭及び第４回内国勧業博覧会の開催前後より，岡崎一帯は，東西に概ね３つの領域に区分しうる土地利用が進められていく。東から，東山裾の南禅寺旧境内地，博覧会場跡地，疏水本線沿いの博覧会場跡地南から西にかけての

領域，の３領域である。

東山裾の南禅寺旧境内一帯では，旧境内地及び塔頭跡地が民間へと払い下げられ，そこに疏水の水を利用した別邸が建設されていった[33]。別邸建設の口火を切ったのが，明治 28 年（1895）より造営された山縣有朋別邸無鄰庵である。この造営以降，まずは蹴上船溜から疏水本線周辺に，疏水の水を防火用水の名目で引いて園池とする別邸が徐々に造営されていった。

疏水の水力発電利用への切り替えにより工場地利用が白紙化した南禅寺旧境内北半部では，明治 39 年（1906）から塚本与三次により土地経営がなされ，７代目小川治兵衛と組んで計画的な別荘地開発がおこなわれていく。塚本は水力発電の出現により宙に浮いた水車の権利を利用して別邸開発を進め，小川治兵衛の作庭による疏水引水庭園が次々と造られ，大正から昭和初期にかけて一大別邸群が形成されることとなった。別邸群は南禅寺境内の風致保存に大きく貢献したのはもちろんのこと，多くの茶会が開かれるなど，社交や文化的営為の舞台となり，近代京都の文化的成熟度を象徴的に示す場となった。

博覧会跡地には，岡崎公園が設けられ，文教施設群が建設されていく[34]。まず，明治 32 年（1899）に武徳殿が，明治 36 年（1903）に京都市紀念動物園が設けられ，翌 37 年（1904）に岡崎公園が

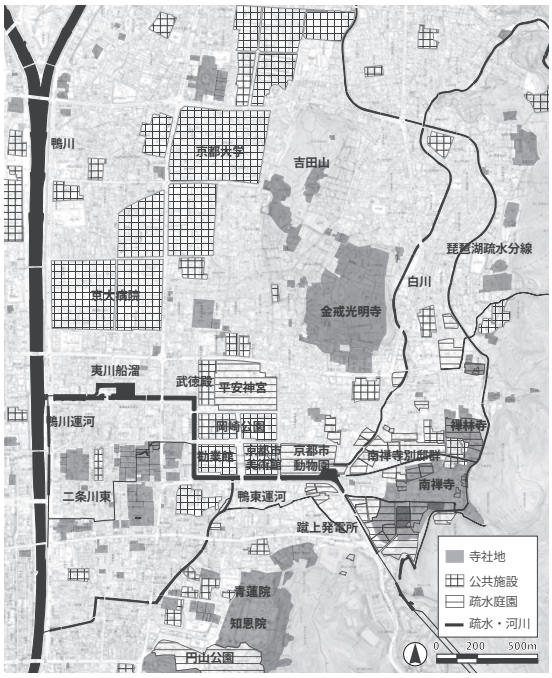


図 12　大正期復元図（大正 11 ＝ 1922 年）

開園した。続いて明治 42 年（1909）に府立図書館と京都商品陳列所が，明治 44 年（1911）に市勧業館が設けられた。大正２，３（1913，1914）年には木造平屋の第二勧業館を新築している。大正６年（1917）には大正天皇御大典に際して二条城内に建てられた大饗宴場の一部を移して岡崎公会堂が建てられた。昭和初期には木造から RC 造への建物の更新が進み，昭和８年に（1933）大礼記念京都美術館が建てられ，昭和 12 年（1937）には室戸台風で倒壊した市勧業館と公会堂東館が RC 造で再建された。あわせて周辺道路や市電軌道の整備も進められた。文化施設群の建設と更新により，岡崎公園は，副都心としての岡崎という歴史的役割を継承するように，近代京都の都市文化を象徴する場となっていく。

岡崎の活性化にともない，疏水南縁には大正 11 年（1922）に遊園地「京都パラダイス」が造られた[35]。わずか３年で閉園したものの，跡地は宅地開発され，現在も当時の良好な住宅を多く残している。

疏水本線沿い，特に岡崎公園の南から西にかけての領域では，疏水を利用した産業施設が多数集積していく。岡崎公園の南側には，水力発電による電力を利用して，平安紡績株式会社，奥村電機商会，龍紋氷室京都工場が設けられた。電力供給が始まったとはいえ，水車動力の利用価値は変わらず，舟運の利便性も手伝って疏水本線沿線では積極的に水車利用がなされた。疏水東濱町，中濱町，西濱町では，精米，精麦，製粉の小規模な工場，あるいは大規模な伸銅工場等が構えられていった。中でも夷川船溜周辺では，船溜形成のための盛り土がなされた結果，水車利用に有利な水位の高低差が生まれ，数多くの水路が引かれて水車利用がなされた[36]。いわば，水車動力による工場誘致予定地が南禅寺旧境内から疏水本線沿線及び夷川船溜周辺へと移動したということができる。こうして，東山裾が風致保存を意識した地区，疏水本線周辺が工場誘致地区として大きく性格付けされていった。七宝制作や染色業などの水流を利用した産業も，白川沿いや夷川船溜周辺において疏水からの引水を用いて展開されていく。

昭和５年（1930）に岡崎公園周辺が風致地区に指定されると，岡崎公園の南側から徐々に工場が撤退していく。跡地は藤井家等により宅地開発が

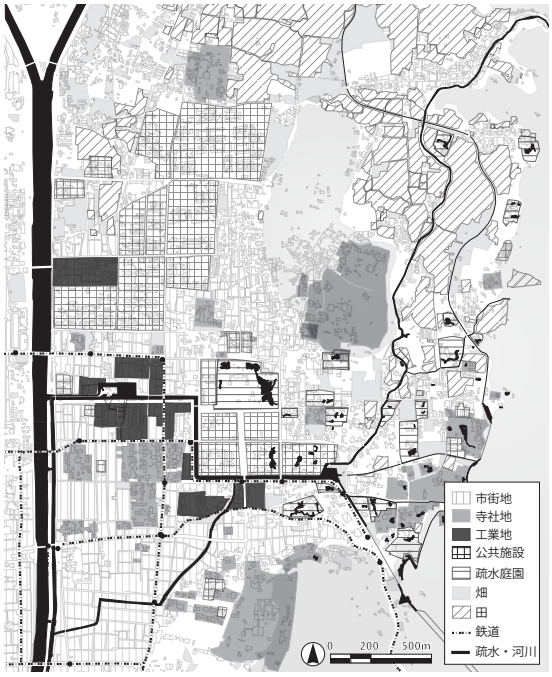


図 13　現在の土地利用

なされた[37]。藤井有鄰館はこの過程を象徴するものといえる。

岡崎の地は，東から西へと，別邸群，近代京都像発信の場，工場地帯と，グラデーションを描くように土地利用が展開される地となった。京都の近代化と都市文化が象徴的に凝縮された場となっていく。

8. 京都の都市文化の象徴空間：戦後から現在へ

第二次大戦後，岡崎公園の諸施設と別邸は，進駐軍により接収された[38]。市勧業館，商品陳列所，公会堂は軍施設として利用され，動物園では残存していた法勝寺八角塔基壇が削平された。接収は，昭和 27 年（1952）まで続いた。

岡崎公園内の建物は，その後も更新されていった[39]。昭和 9 年（1934）の室戸台風で倒壊した公会堂の跡地に，昭和 35 年（1960）に京都会館が建設された。京都国立近代美術館は，昭和 38 年（1963）に市勧業館を改装して国立近代美術館京都分館として開館し，昭和 42 年（1967）に独立した。昭和 61 年（1986）に現在の建物に建て替えられた。市勧業館は，平成 8 年に建て替えられてみやこメッセとなり，府立図書館は平成 12 年に外観イメージを残して全面改築された。個々の施設は時代の要請に合わせて順次更新されながら，広い空地を残し，美しい街路樹と東山への眺望を活かした空間が保たれており，景勝の文化ゾーンとしての岡崎のイメージは今日も継承されている。文教空間のイメージは，例えば神宮道における美術関係店舗の増加など，周辺地区へも波及している。

一方，疏水自体に関しては，昭和 20 年代に舟運が廃され，昭和 46 年（1971）には踏水会による水練もおこなわれなくなるなど，親水利用が終焉を迎えた。疏水縁のかつて荷揚げ場として用いられていた岸辺には，遊歩道が整備された。夷川船溜近辺に集積していた大小の工場も徐々に衰退，移転し，住宅地化が進んだ。水車もすべて撤去され，現在では疏水から引水された水路が一部暗渠化されて当時の面影を伝えている。地域における疏水の水面は，利用される場から眺められる場へと役割を変え，今に至っている。

南禅寺別邸群では，所有者が徐々に変化し，料亭や結婚式場など，住宅以外の用途に用いられる物件も増えてきた。とはいえ，別邸群がつくり出す緑と水の豊かな空間は今日も維持されている。

比類無き空間的な質と疏水利用園池という歴史的特性を有する別邸群，京都の都市文化を象徴的に示す場としての岡崎公園，疏水の恩恵を受けて集積した工場地から転じた住宅地。岡崎の地では今日も，疏水を軸にした土地利用が，東から西へとグラデーションを描くように展開されている。

9. 岡崎の土地利用変遷の特質

以上，岡崎の土地利用変遷の概要を追ってきた。岡崎の土地利用において，歴史を通じて見られる特徴は，大きく言って次の 3 点にまとめられよう。１点目は，京都の副都心としての役割の継続である。平安時代以来，岡崎の地は鴨川以西の京都の中心部と対応するように盛衰を繰り返し，明治以降は京都の近代化と都市文化を象徴する場となった。岡崎には，京都の歴史が縮図として刻まれており，それが現在にも生き続けている。

２点目は，白川と琵琶湖疏水の複合的な水利用である。江戸時代までは白川がこの地を潤し，園池や畑作，あるいは手工業にその水が利用され

た。疏水の開削は旧来の水系を一変させ水利用を多様化させたが，水が潤す土地という意味では近世以来の水利用が発展的に継承されているということができる。

３点目は，大規模施設と畑地が反復的に繰り返されてきた，独特の制約を受けた土地利用の経緯である。平安時代後期以来この地では，六勝寺に代表される白河街区の園池を有する寺院と別荘，幕末の各藩京屋敷，そして岡崎公園や南禅寺別邸群と，緑と水の豊かな大規模施設が，間に近郊農村期を挟んで営まれてきた。農村期にも，聖護院蕪菁や大根に代表される特産品を生み出した質の高い農業が展開された。こうした土地利用上の特有の性格は，いずれも白川が作り出す扇状地と鴨川氾濫原という表層地質の特徴と関連している。現在目にすることのできる近代以降の土地利用も，地質が作り出す土地利用の流れに乗っているのである。　（清水　重敦）

註

1）冨井眞「京都白川の弥生前期末の土石流」京都大学構内遺跡調査研究年報（2000 年度），2005 年，225 ～ 262 頁。
2）上村和直「院政と白河」角田文衛総監修『平安京提要』角川出版，1994 年，513 頁～ 546 頁。
3）財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和 52 年度京都市埋蔵文化財調査概要』2011 年。財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984 年。財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1985 年。財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平成 4 年度度京都市埋蔵文化財調査概要』1995 年。
4）財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平成 3 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1995 年。
5）財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平成 4 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1995 年。
6）財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平成 7 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1997 年。財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報　白河街区・岡崎遺跡』2001 年。
7）上島享『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会，2010 年，464 ～ 496 頁。
8）堀内明博『日本古代都市史研究－古代王権の展開と変容』思文閣出版，2009 年。
9）前掲註 7 文献，479 ～ 480 頁。
10）山田邦和『京都都市史の研究』吉川弘文館，2009 年，100 ～ 103 頁。
11）前掲註 10 文献，154 頁。
12）村井康彦編『平安建都一二〇〇年記念　甦る平安京』淡交社，1994 年。なお，復元模型は，現在，京都アスニー内京都創生館にて展示されている。
13）古代中世地震史料研究会による web ページ「[古代・中世] 地震・噴火史料データベース　β版」では 25 件の史料が掲載されている。http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/erice/（2010 年 12 月 11 日閲覧）。
14）たとえば「玉葉」（元暦２年７月９日条）には「又白川邊御願等，或有顛倒之所，或築垣許破壊，法勝寺九重塔心柱雖不倒，瓦已下皆震剥，如無成云々」，「吉記」（元暦２年７月９日条）では「白河中，延暦〔法勝歟〕寺，金堂廻廊，鐘樓，阿彌陀堂，同御所，行堂廊，中門，車宿，門々，[但法華堂 | 不顛]，三面築垣寺，此外九重塔 過半破損，尊勝寺，講堂，五大堂，四面築垣，西門，此外東塔九輪折落，最勝寺，薬師堂，三面築垣，圓勝寺，築垣并中御塔九輪破損，寶莊嚴院，北廊築垣等，得長壽院，廿三間已以顛」（〔　〕は原注，［　］は割注）とある。
15）前掲註 8 文献。
16）岡崎村には青蓮院領・一条家領・西大路家領・孝順院知行・立入宗信知行・池上光太郎知行・八坂社領・南禅寺領・金戒光明寺領・知恩院領・正法寺領・双林寺領・長楽寺領・建仁寺領があり，きわめて複雑な相給村の典型であった。京都府歴史資料館歴史資料課『京都府域関係古文書所在情報の一整理　近世領主ならびに近世村町別閲覧可能関連文書一覧―山城編１・２―』（京都府立総合資料館紀要 29・30 抜刷合冊）2002 年，462 頁。
17）上杉和央「都市郊外の景観史―岡崎地区の履歴と記憶―」，野口祐子研究代表『明治時代以降の京都イメージにおける都市と自然の調和に関する学際的研究』京都府立大学文学部，2011 年，５～ 36 頁。
18）高嶋四郎編著『京の伝統野菜と旬野菜』トンボ出版，2003 年。
19）『京都坊目誌』内「上京第廿七学区（岡崎町）之部，字宮ノ脇町」（『新修京都叢書』19，臨川書店，1968 年），424 頁。
20）「むすび捨たるまくらの草葉」（『本居宣長全集』18，筑摩書房，1973 年）。「寛政五年上京日記」（『本居宣長全集』16，筑摩書房，1974 年）にも訪問時の記述がある。
21）京都市編『京都の歴史　７　維新の激動』學藝書林，1974 年，331 頁。
22）京都府立総合資料館蔵（京都府庁文書　明 3-19）。
23）本資料については，次の先行研究がある。①磯航「行政文書にみる京都　明治の京都藩邸処分」（『総合資料館だより』147，2006 年，５頁），②鈴木栄樹・牧知宏「明治初年における在京藩邸地処分に関する京都府行政文書の概要」（小林啓治（研究代表）『京都府行政文書を中心とした近代行政文書についての史料学的研究』2005 年～ 2007 年科学研究費基盤研究（B）研究成果報告書，2008 年），103 ～ 118 頁。
24）『京都坊目誌』内「上京第廿七学区（聖護院町）之部，聖護院町」（『新修京都叢書』19，臨川書店，1968 年），330 頁。
25）『京都坊目誌』内「上京第廿七学区（岡崎町）之部，岡崎町」（『新修京都叢書』19，臨川書店，1968 年），381 頁。
26）南禅寺における寺領上知及び塔頭寺院の統廃合については，櫻井景雄『南禅寺史』下，法蔵館，1977 年に詳しい。
27）琵琶湖疏水の建設目的，路線決定過程については，織田直文，玉置伸吾「第一琵琶湖疏水開発における立案要因」「第一琵琶湖疏水開発における認可要因」「第一琵琶湖疏水開発における調整要因」『日本建築学会計画系論文報告集』

426，429，451，1991 年，1992 年，1993 年及び小野芳朗，西寺秀，中嶋節子「琵琶湖疏水建設に関わる鴨東線路と土地取得の実態」『日本建築学会計画系論文集』676，2012 年に詳しい。

28）前掲註 27 小野，西寺，中嶋文献。

29）「琵琶湖疏水線路インクライン以西至鴨川平面図」（琵琶湖疏水記念館蔵）。

30）小林丈広「都市祭典と政治―都市間競争時代の歴史意識」『日本史研究』523 号，2006 年。

31）模造大極殿の敷地変更と建設過程については，『平安神宮百年史』平安神宮，1997 年に詳しい。

32）岡崎で開催された博覧会については，『京都の歴史　第８巻　古都の近代』京都市史編さん所，1980 年に詳しい。

33）南禅寺旧境内における別邸建設については，尼崎博正編『植治の庭　小川治兵衛の世界』淡交社，1990 年，尼崎博正『七代目小川治兵衛』ミネルヴァ書房，2012 年，京都市文化財保護課『岡崎・南禅寺界隈の庭の調査』京都市内未指定文化財庭園調査報告書　第一册，2012 年を参照。

34）岡崎公園における文教施設群の建設については，前掲『平安神宮百年史』にまとめられている。

35）京都パラダイスについては，第５章第４節参照。

36）夷川船溜形成に関わる土地改変と水車利用については，第１章第３節及び第５章第４節参照。

37）岡崎公園南の住宅地開発については，片木篤，藤谷陽悦，角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会，2000 年及び本報告書第５章第４節参照。

38）岡崎一帯における進駐軍による接収については，『京都の歴史　９　世界の京都』京都市史編さん所，1980 年に詳しい。

39）前掲註 38 文献。

第３節　地形・地割の変遷

岡崎の地は，都市化と農村化が繰り返される独特の土地利用変遷を経てきた。大胆な変遷を重ねてきたものの，秩序なく変化を繰り返してきたわけではなく，変化の中にも一定の法則性を読み取ることができる。まず，京都を支える後背地ないし副都心としての役割を果たし続けてきたこと。そして古くは白川，新しくは琵琶湖疏水の水をふんだんに利用して空間を形成してきたこと。もう一点，大規模な空地と，園池を持つ大規模施設群という対照的な土地利用を反復し続けてきたことである。こうした特性は，自然要素が土地利用を強く規定するこの地の風土，あるいは京都中心部との強い関係性の下に土地利用が規定されるこの地の位置に担保されたものであろう。

本節では，岡崎の土地利用の特性を担保するもののうち，物理的要素である水系・地形と地割の変遷を追う。

１.水系・地形の変化

岡崎の地は，東山及び神楽岡丘陵と白川の流れによって，地形的骨格が形作られている。東山の山裾から，白川の流れに沿い，北東から南西へとゆるやかに下がる扇状地をなし，鴨川へと至る。従って，全体が緩やかな勾配を持ちつつも，比較的平坦な地形である。

しかし，子細に見ると，この緩やかな勾配が微妙ながら整形されていることが知られる。勾配としてはごく緩いものの，街区の両端では１ｍ近くの高低差が生じるところもある。大規模な敷地利用が多い岡崎では，無視し得ない微地形として作用する。この微地形は，平安時代以来意識されてきており，高低差の吸収のための造成がおこなわれてきた。

この微地形を縫うように巡る水の流れも特徴的である。琵琶湖疏水はもちろんのこと，疏水開削以前に遡る水系にも注目すべき特徴があり，こうした水系は岡崎の土地利用のあり方と密接に結びついている。以下，水系，地形の順に，変化の過程をみていこう。

（１）　水系の変化

岡崎を特徴付ける水系には，白川，鴨川，そして琵琶湖疏水がある。各々につき，水系とその変化を，地形や土地利用との関係を念頭においてみていこう。

白川の流れは，岡崎の地に扇状地の地形を形成するとともに，この地の土地利用の上で主要な導水路としての役割を果たしてきた。平安時代後期には白河街区内の寺院や別業内の園池に水を供給し，中世以降この地が農村化してからは灌漑用水としての役割を果たしてきた。近世の二条川東地区開発以降は，この地区にも水を供給してきた。

白川の流路　比叡山中から山中越の谷を抜けた白川は，元来は南流せずにそのまま西流し，東山山麓最大の扇状地である北白川扇状地を形成していた。この白川が，神楽岡の東を南流する現在の流路へと変わった時期については判然としないが，比較的新しい時期であると推定されている[1)]。

現在の白川の流路は，琵琶湖疏水開削により一部が改変されているものの，概ね近世以来の流路から変わっていない。この流路は，絵図上では近世初頭まで遡って確認することができる。

近世以前における白川の流路は，発掘調査，記録資料，絵図等より，変遷があったことが指摘されている。発掘調査では，岡崎中学校内（京都市５次調査），岡崎法勝寺町の法勝寺旧境内（市 35 次調査），岡崎円勝寺町東端（市 59 次調査）で流路跡が見つかっている（図 14）。岡崎円勝寺町の流路跡は琵琶湖疏水開削直前までの白川流路である。前２例はこれとは別個の中世に遡るもので，白川の旧流路，あるいは後述する支流のいずれかである。

近世初頭から現在に至るまでの白川が，法勝寺旧境内を避けるように，その東南隅をかすめて流

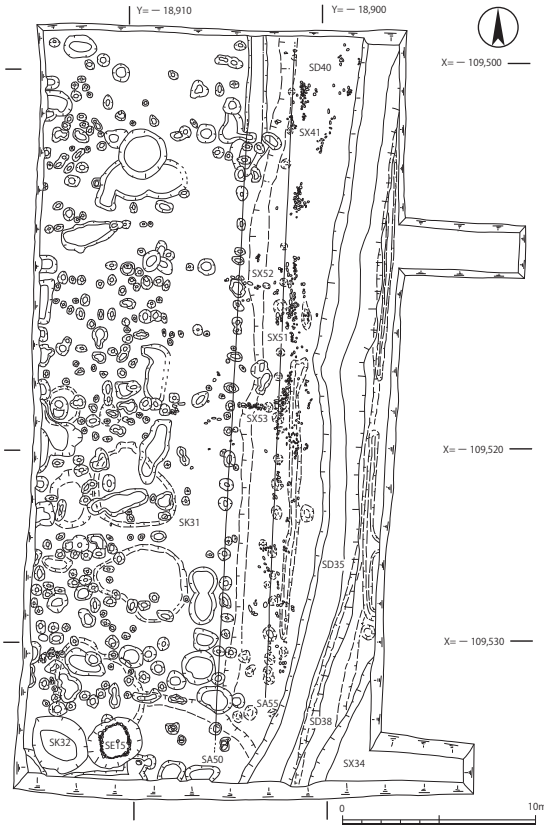


図 14　発掘調査で確認された白川流路跡
SD40（京都市第 55 次調査）

れていることからすれば，遅くとも法勝寺造営以降は現在の流路をとっていたものと推定される。従って，上記前２例の流路跡は，白川の支流の可能性がある。

白川下流部の流路変更　三条通付近より南の白川下流部については，中世末に流路が変更されたという伝承がある[2)]。疏水開削前の白川は，南禅寺の正面付近を西流し，白川橋付近より南流するものであったが，この南流する部分は，元来は白川の派川である小川であった。旧本流は，南禅寺の正面を西流する流れがそのまま西に延長されて三条通の北を流れ，鴨川に注ぐものであり，この川を境に，北を北白川，南を南白河といったという。これは『山城名勝志』巻第十三「小川」及び「北白河」の項目に記されており[3)]，「中昔京師内外地図」（宝暦３=1742 年，森幸安）にも表現されている（図 15)。豊臣秀吉の時代に三条大橋の架橋に際し，付近の地盤が上がって流れが淀むようになり，大水を契機に小川が本流に変わったものという。

白川の支流　近世には，岡崎の畑地を横断するように，白川の支流が流れていた。この支流は，岡崎扇状地の扇頂部より西に分岐して南流し，現在の冷泉通付近から二条通，仁王門通へと鍵の手に折れながら西流し，法林寺北から鴨川に注いでいた。鴨川に注ぐ最下流は，上述の白川の旧本流といわれる流路の最下流の位置と一致する。

この支流は，絵図上では寛文９年（1669）作成の金戒光明寺所蔵岡崎村絵図（図 16）に明瞭に描かれており，元禄十四年實測大絵図（後補書題）（図４）にも描かれている。いずれも二条川東地区の開発以前の絵図であり，支流が近世初頭には遡ることが知られる。この支流は，金戒光明寺所蔵岡崎村絵図において「井溝」と記されており（図 18)，岡崎村の畑地への灌漑用水として利用されていたことがわかる。

川東地区開発以後の絵図では，たとえば「天明六年京都洛中洛外絵図」（図 19）では，二条通沿いに西流して川東地区に入り，地区内では道路側溝として南流し，法林寺北側より鴨川に注いでいる。川東地区開発に際して，流路が街区形状に合わせて変更された様がうかがえるが，基本的な流れは継承されている。この流路は，琵琶湖疏水開削までこの位置を保って流れていた（図 20)。

発掘調査によって確認された流路跡の中に，この支流のものと推定できる例がある。京都市が 1987 年に実施した岡崎中学校東南隅の発掘調査（市 55 次）で確認された流路跡 SD40[4)] で，現在の白川の西側を南西に流れる形で検出されている（図 14)。金戒光明寺所蔵岡崎村絵図の支流位置とよく合致する。この流路は中世の面で検出されており，遅くとも中世までは遡りうることがわかる。発掘地点が法勝寺の想定境内より東に外れていることからすれば，法勝寺境内の園池である瑤池への導水路であった可能性も想定できる。あるいは，法勝寺以外にも園池を有した円勝寺や白河南殿への導水の役割も果たしていたかもしれない。白河街区内の流路については，発掘調査では明瞭な遺構が見つかっていないが，規模の大きい道路側溝が検出されており，あるいはこうした側溝へと接続して導水していた可能性もある。

以上からすれば，白川の扇状地である岡崎の地では，この支流の存在によって園池を有する寺院，別業が形成され，後にはこれが灌漑用水となって畑を潤していた，という可能性が想定できる。

図 15　中昔京師内外地図（部分）

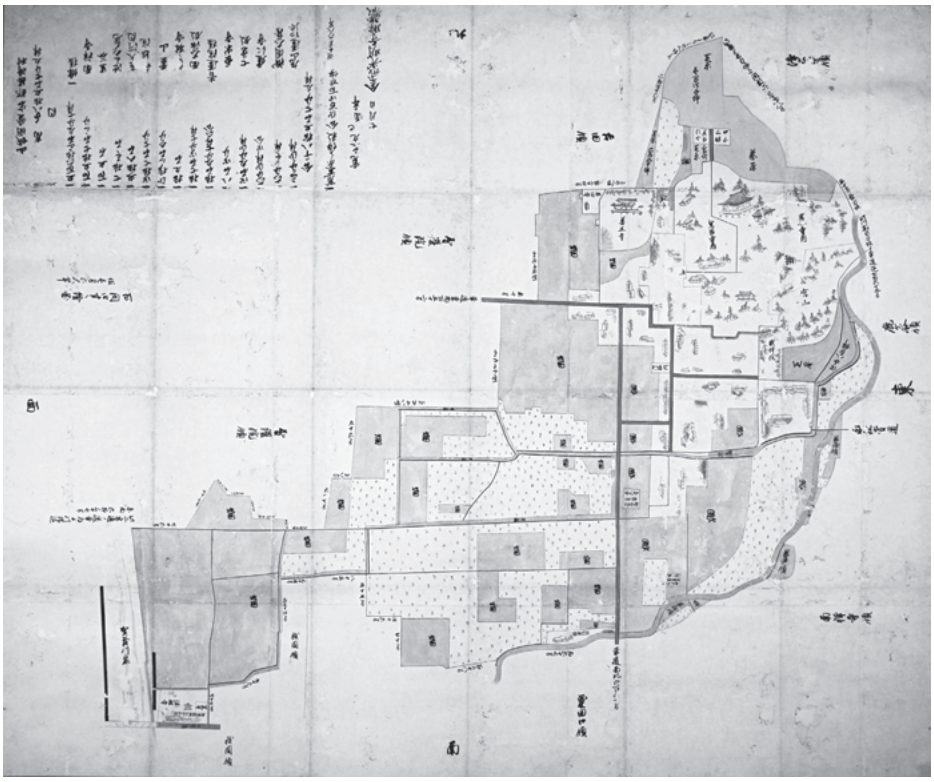


図 16　金戒光明寺所蔵岡崎村絵図（寛文９=1669 年）

図 17　元禄十四年實測大絵図（後補書題）

図 18　金戒光明寺所蔵岡崎村絵図における「井溝」

鴨川堤の整備　鴨川に沿った一帯は氾濫原で，居住に適さない状況が長く続いた。承応３年(1654)の絵図「新板平安城東西南北町并洛外之図」には「二条川原」と記され，寛文９年（1669）の金戒光明寺所蔵岡崎村絵図では，二条川東地区全域が畑地となっている（図 16)。

寛文９年からの鴨川護岸改修により，左岸では二条から五条の間に護岸が形成され，二条川東地区の安定した土地利用が可能となった。この護岸改修により，二条川東地区が市街地開発されていく。

琵琶湖疏水の開削　その後，岡崎一帯の水系に大きな変化を及ぼしたのが，明治 23 年（1890）の琵琶湖疏水の開削である。地区の南東から北西へ，扇状地の等高線を縫うように疏水本線が，そして東山の裾を北流して疏水分線が通され，既往の主要な水系である白川，あるいは草川等の谷水を横断し，琵琶湖からの水と混じり合う現在の状況が生まれた。

疏水本線は，岡崎の畑地を鍵の手に折れて直線状に進み，夷川船溜で閘門を設け，鴨川に注ぐ。舟運の積極利用を想定したものである。明治 27 年（1894）には，鴨川に沿って伏見に至る鴨川運河が建設された。

分線は，南禅寺のインクライン上から分岐して

図 19　天明六年京都洛中洛外絵図[5)]

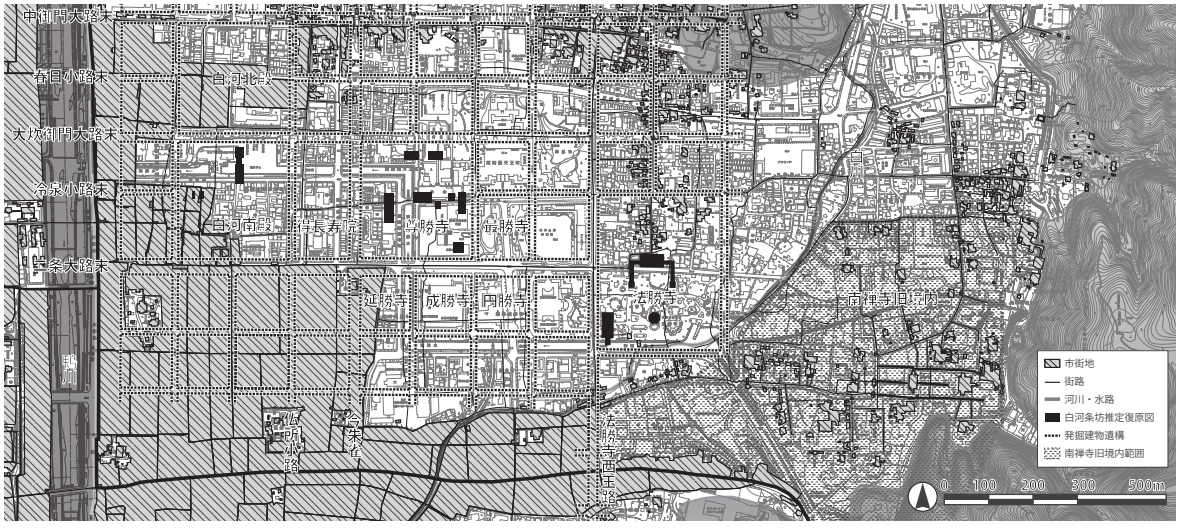


図 20　明治 16 年地図に基づく水系復元図

東山裾を北上し，北白川，松ヶ崎，下鴨を抜け，南下して御所へ至る。流路が直線及び円弧で構成され，自然流路とは異なる独特の河川景観を生み出している（巻末図版９参照）。

疏水本線は，白川の本川，支流，草川をそれぞれ分断した。白川本川は，蹴上で一旦疏水に合流し，神宮道西より南へ分水する流路が新たに設けられた。白川支流は二条川東地区へ水を供給していたが，疏水により断たれたため，後に地元からの要請で二条橋西詰より琵琶湖疏水の水を取り，大恩寺，三福寺境内を通って旧来の水路へと流す流路が確保された（第５章第４節参照）。草川も分断されたものの，疏水合流点より下流は無鄰庵等の水が流れ出る水路として残り，白川に注いでいる。

この変化は旧河川の生態系を大きく変えるものでもあったが，現在では琵琶湖のかつての生態系を今に残すレフュージアとしての性格を有するに至り，新たな生態系上の役割を果たすようになっている（第２章第３節参照）。

琵琶湖疏水の建設により，水利用のあり方も，白川の水を直接的に利用する水利用のあり方から，琵琶湖疏水の水を利用する現在の水系へと大きく転換した。舟運，水力発電，上水道の利用という新たな水利用が加わった点で画期的なできごとであったが，水車動力や庭園への導水という伝統的におこなわれてきた水利用も継承し，発展させており，旧来の岡崎の水利用の延長上に新たな都市基盤として機能したものと理解すべきであろう。

（２）　地形の変化

岡崎の地形は，概ね扇状地としての原地形を保っている。しかし，都市化の過程で微細ながら土地造成がなされ，原地形を大きくは変えずに平坦面が造り出され，あるいは部分的な土盛りがなされた。こうした造成によって造り出された微地形は，この地の土地利用のあり方を根底で規定する要因となったものと考えられる。

岡崎の地形変化のうち，特に人工的な地形改変がおこなわれた白河街区の形成期，琵琶湖疏水の開削，第４回内国勧業博覧会場の造成，についてみていきたい。

白河街区の地形造成　人工的な地形改変は，この地が都市的に開発された平安時代後期に遡る。白河街区の発掘調査成果を検証した堀内明博によれば，六勝寺造営時に際して，各寺院の敷地を平坦に地均しし，東の法勝寺から西の尊勝寺へと，雛壇状の地形が造成されたという[6]（図 21）。原地形の勾配はごく緩いものであるが，各寺院の敷地は東西２町分に及ぶため，法勝寺―最勝寺間で 90cm 程度，最勝寺―尊勝寺間で 50cm 程度の段差となっている。白河街区の道路は，この雛壇状の平坦地を縁取るように形成されており，白河街区の方格地割は，この微地形との関係においてとらえる必要がある。

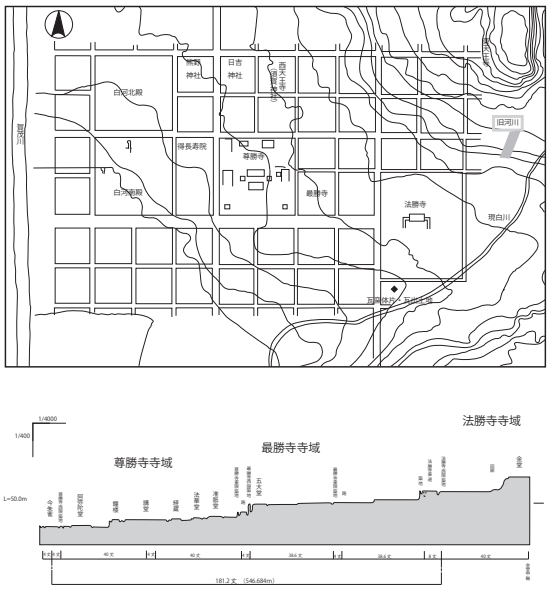


図 21　堀内明博復元白河街区原地形断面模式図

この雛壇状地形は，六勝寺の衰退以降，近郊農村への転換を容易にしたものと推測できる。畑地としての利用にも平坦な方が合理的であるし，畑地の耕作上は段差を解消する必然がなく，地形がその後も受け継がれる要因となった。この地形は，明治の内国勧業博覧会会場の造成までは地表面上に段差及び畦として残存したことが古写真より確かめられる（図 22）。

また，法勝寺の基壇は，特に巨大かつ強固なものであったがゆえ，容易には破壊し得ず，その後も地表面上に痕跡を残し続けた。「塔ノ壇」と呼ばれ，京都市動物園内に残存していた八角九重塔の基壇が最終的に破壊されたのは，第二次大戦後，進駐軍が接収していた時期であった。金堂基壇は，現在も周囲より一段高く残り，個人住宅の敷地となっている。

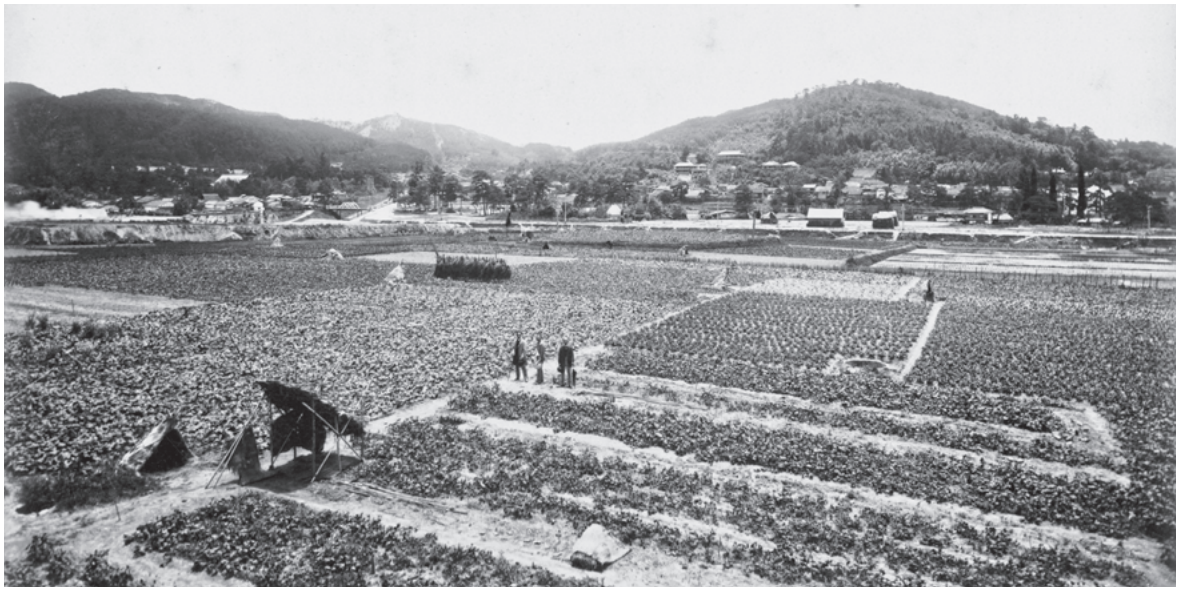


図 22　明治 20 年代における岡崎の畑地

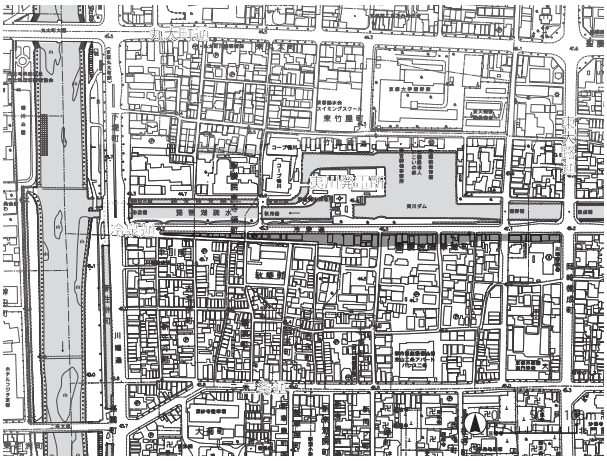


図 23　夷川船溜南側の高低差写真（左）と土盛範囲図（右）

琵琶湖疏水開削にともなう夷川船溜の造成　その後の大きな地形改変には，琵琶湖疏水の開削と，平安遷都千百年紀念祭及第４回内国勧業博覧会の開催にともなう会場の造成が挙げられる。

琵琶湖疏水本線は，概ね線路内の掘削のみで開削されているが，実は，一部で地形改変がなされた。夷川船溜周辺である。夷川船溜沿いの地盤面は周辺から明らかに高まっており，南側では周辺地盤面より 1.7 mほど高い。視覚的にも意識的な土盛りがなされたものと想定できるほどである（図 23）。この箇所につき京都市が平成 23 年度におこなった発掘調査では，近世の地表面より 1.5 mほどの近代の盛土が確認されており，琵琶湖疏水開削にともなって土盛りがなされたことが確かめられる[7]（図 24）。土盛りといっても夷川船溜の周囲に限られ，それほど大規模なものではないが，疏水開削以後の岡崎の土地利用上，無視できない意味をもっている。

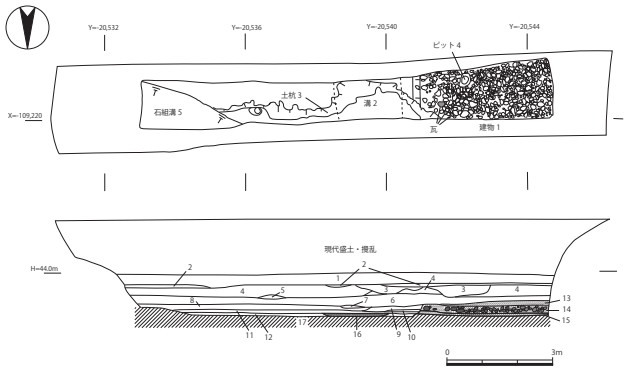
蹴上船溜から鴨川合流点までの間は，地盤面の高低差が６mほどある。したがって，疏水本線をそのまま鴨川に流入させると流速が早くなりすぎ，舟運及び治水上，問題が生じることになるため，夷川船溜と閘門が設けられた。閘門は高低差が 17 尺（5.1 m）とられた。当初は蹴上から真西に一直線で抜く案も検討されたが，閘門を２箇所設ける必要があり，舟運に不合理なため廃案になっている。実際，蹴上から西への路線を延長し川端通と交わる位置では，現在の疏水本線が川端通と交わる位置より２mほど低く，蹴上船溜との高低差が８mに及ぶことになる。また，蹴上から

夷川船溜まで斜行する案も検討されたが，鍵の手に折れる現在の路線に落ち着いた（この間の検討については第５章第２節に詳しい）。

現在のルートを地形図と重ねてみると，扇状地の等高線に沿うようにルートが設定されていることに気づく。最小限の高低差で本線を処理し，閘門１つで鴨川へと流すことが意識された面があろう。『琵琶湖疏水要誌』における「工事方法」と「工事成績」の項目，そして田辺朔郎『琵琶湖疏水工事図譜』掲載の設計図では，蹴上から夷川の船溜までは，勾配が「水平」に設定されている[8]（図25）。実際の水面高でも，蹴上から夷川船溜までは，ほとんど高低差がない。すなわち，夷川船溜は，この地盤高の状況からして，地盤を嵩上げしない限り，ダム状の船溜を形成することができないわけである。したがって，夷川船溜周辺の土盛りは，琵琶湖疏水本線の形成上，不可欠なものであったということができる。

この土盛りによって生じた1.7ｍほどの段差は，第４章に詳述するように，この地区に水車動力による諸工業の集積をうながした。疏水から水路を引き，水車を廻した後，再び疏水へと還流することが可能であった。つまり，夷川船溜の形成は，副産物として水車動力による工業地区を生んだのである。したがって，夷川船溜の形成は，土地利用上のポテンシャルを上げる地形改変として評価することができる。

博覧会場の造成　平安遷都千百年紀念祭及第４回内国勧業博覧会の開催に際しては，敷地買い上げの上，地均しがおこなわれた。敷地地均しについては，『平安遷都紀念祭紀事』に詳しい記録がある[9]。造成前は，敷地全体で最大 24 ～ 25 尺の高低差があった。そのため，博覧会敷地全体を水平にすることはできず，敷地を高低差により４区に



1　7.5YR2/1 黒色砂泥【近世耕作土】
2　10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫【洪水堆積層】
3　10YR4/2 灰黄褐色砂礫【土砂廃棄土杭】
4　7.5Y2/1 黒色泥砂（明黄褐色砂泥ブロック状に混じる）
5　2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
6　2.5Y3/2 黒褐色砂泥礫混じり【中世耕作土】
7　5Y2/1 黒色砂泥（炭化物・焼土・焼瓦多量に含む）【土杭 3】
8　2.5Y3/2 黒褐色砂泥礫混じり【中世包含層】
9　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂【基壇崩落土】
10　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂（礫少量混じる、やや締まりあり）【基壇崩落土】
11　10YR4/2 灰黄褐色シルト（非常に固く締まる）【整地層】
12　7.5YR4/3 褐色砂泥礫混じり【整地層】
13　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂（礫少量混じる、固く締まる）
14　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂（直径３～ 20ｃｍの礫多量に含む）　【建物１基壇地業】
15　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（固く締まる）
16　7.5YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（凝灰岩片を多量に含む）【溝 2】
17　7.5YR4/1 灰色砂礫【基盤層】

図 24　夷川船溜角側土盛部の土層断面図（平成 23 年度京都市内遺跡試掘調査）

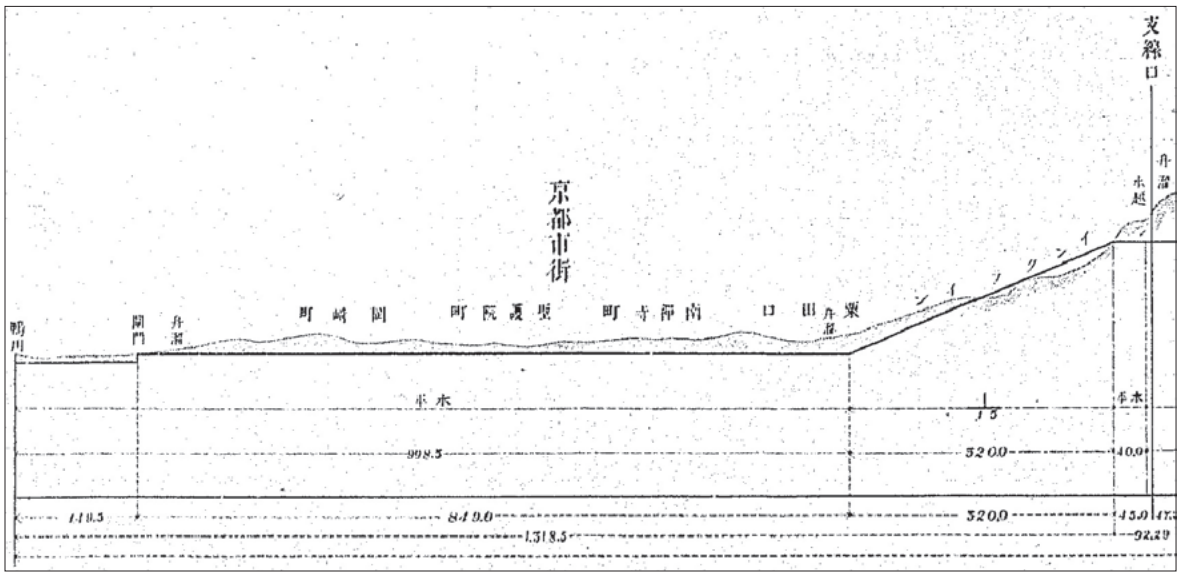


図 25　『琵琶湖疏水工事図譜』琵琶湖疏水設計図における疏水本線の勾配

分け，各区内で平坦に地均しした。さらに，元来平安遷都千百年紀念祭紀念殿建設予定地であった第５区，すなわち現在の動物園敷地も，紀念殿建設位置が博覧会敷地北縁に変更されたため，あわせて地均しをおこなっている。

この大規模な地均し工事により，平安時代後期に雛壇状に造成されて以降残存していた地形が破壊され，現在目にすることができる岡崎公園の地形が形成されることとなった。とはいえ，各区間には高低差がある。現在，広道，神宮道を境に，地盤面に高低差があることが，目視でも確認できる。

（３）　水系・地形の変化の特質

岡崎の地形は，元来，白川によって形作られたものである。扇状地ゆえに土地利用が制限されるとともに，逆に水系の発達を促しており，水系・地形と土地利用とが密接に結びついていた様がうかがえる。

近世までの水系は，白河街区の形成期まで遡るものである可能性が認められる。白河街区の地形に沿い，園池に水を供給していた可能性のある水路が，六勝寺衰退後も畑地への灌漑用水として機能した。扇状地の地形ゆえに必要とされた水系が，土地利用に連続性を与えてきたことになる。

琵琶湖疏水の本来的機能は，京都市全体に及ぶものであるが，岡崎の地にも，水車利用や庭園用水の利用など，直接的な影響を及ぼした。これらの水利用は，地形の部分的改変と相俟って大規模に推進されたが，実は伝統的な水利用の延長上にあるものといえ，近世までの岡崎における水利用と連続性を有していると評価すべきであろう。

地形の変化については，六勝寺及び白河街区の形成時における地形改変が，扇状地の地質と相俟って，岡崎の土地形状と土地利用を長く規定し続けてきた。近代に至り，特に岡崎の中心部で大きな地形改変を受けたが，水利用と大規模土地利用の原則には変わりがなく，むしろ土地のポテンシャルを上げる改変がなされたものと評価することができる。

２.地割の変化

水系と地形とともに岡崎の土地利用を強く規定する要素となったのが，地割である。岡崎の地に最初に刻まれた大規模な地割である平安時代後期の白河街区は，雛壇状の微地形や水系と相俟って，この地の性格に隠然たる影響を持ち続けた。岡崎の地割の変遷とは，白河街区の残存と変形の歴史と言い換えてもよいほどである。岡崎における地割の形成とその残存，改変の過程を追っていこう。

（１）　古代：白河街区の形成（図７）

白河街区の復元案　岡崎の地に大規模な地割が施されたのは，平安時代後期に六勝寺の建設と白河街区が施工されたのを嚆矢とする。白河街区の地割については，堀内明博が既往の研究を総括し，最新の復元案を提示している[10)]。

本格的な発掘調査は昭和 34 年（1959）より開始され，方格地割があったことが明確になるとともに，複数の復元案が提示されてきた。早期の案としては，福山敏男の文献からの復元，杉山信三の発掘成果を加味した復元案がある。昭和 53 年（1978）には，京都大学医学部病院構内で発掘調査がおこなわれ，岡田保良が街区が真北から２度 50 分西にずれることを指摘した。続いて濱崎一志が地割を再検討し，大路の配置に言及，平安京と同一形式で白川街区が形成されていることを確認している。考古学上の課題としては，方格地割が施された範囲，また，白河街区内の法勝寺，円勝寺，白河南殿に設けられた園池への導水方法の問題が残されている。

現在判明している白河街区の地割は，次のようなものである。街区の範囲は，南北は二条通末を境に，南に２町，北に４町以上，東西は現在の東大路通の東を通っていた今朱雀を中心に東西各４町に及ぶ。各町間は平安京の小路の規模の道路が通される。街区の東に法勝寺が突出する。

主要道である二条大路末は，平安京二条大路の延長位置によく一致する。幅も 17 丈と同規模であり，その他の小路も含め，東西道は平安京とほぼ一致する。

白河街区の残存状況　白河街区の条坊は，現在の地割にもよく残存している。東西道では，主要道路である二条通が現在もよく踏襲され，聖護院の東西道も残る。南北道は，旧法勝寺西縁の法勝寺車道が「広道」としてそのまま残るほか，主要道であった今朱雀もわずかながら疏水の南北に痕跡を留めている。すなわち条坊は基本的に残存して

おり，変化としては，六勝寺衰退の過程で，２町を越える大規模敷地の中に新たな道が通されていったのが主なものである。

白河街区は先述の雛壇状の地形改変と一体で造成されており，いわば三次元的な立体地割であった。それゆえに，近世末まで継承され，岡崎地区の地割りの根幹をなすものとなったのであろう。明治以降，琵琶湖疏水の開削と博覧会場の造営がなされたが，大規模敷地であるとはいえ，岡崎全体からみれば部分的な地割改変であり，その後も街路の骨格は残存し，現在に引き継がれている。

（２）　中・近世：近郊農村化と周辺の寺社地，市街地形成（図９・10）

中世には，六勝寺とそれを支えた白河街区が衰退し，代わって南禅寺，金戒光明寺といった寺社，あるいは新しい市街地及び村落が形成されていく。白河街区の外周に新たな寺社や集落・市街地が形成され，徐々に中心部が畑地化していくという，いわば白河街区を反転させるような土地利用の変化が進行する。

南禅寺，金戒光明寺塔頭群の形成　南禅寺は，13世紀末に，東山山麓の森林を切り開いて創建された。その後，南禅寺塔頭群の形成にともない，東山山麓の白川より東側一帯が寺院で埋め尽くされていく。黒谷の岡には，金戒光明寺が創建され，徐々に塔頭群が形成されていった。その一方で，岡崎の中心部をなす白河街区の六勝寺は，中世に衰退し，街区全体が徐々に近郊農村化していった（第３章第１節）。

三条通の都市化　三条通は，鎌倉幕府成立以降，東海道の重要性が高まる中で，京都の出入り口として認識されるようになる。三条通の市街地化は，東海道が整備された江戸期より進んだものと見られ，近世中期には町家が立ち並ぶ景観が形成された[11]。

岡崎村・聖護院村の形成　中世以降，岡崎の畑地の東，北を縁取るように，村落が形成された。後の岡崎村と聖護院村である。いずれも白河街区の条坊に沿った街村の形態をとっている。白河街区の中心が畑地となり，集落が周縁部に位置するのは，六勝寺が存立している間に集落が徐々に形成され，六勝寺と入れ替わるように畑地が発達していくということを示すものであろうか。

寛文９年（1669）の金戒光明寺所蔵岡崎村絵図をみると，畑地の形状と畦の位置が白河街区以来の地割を踏襲していたことがうかがえる。先述の通り，白河街区の地割が高低差をともなうものであったこと，おそらく地割に沿うように水路が設けられており灌漑用水への転用が容易であったこと，が要因となり，地割が踏襲されたものと推測される。

二条川東地区の開発　岡崎の西端，鴨川に沿った地区は，「二条川原」と呼ばれる鴨川氾濫原であった。寛文９年以降の鴨川堤の整備以降，安定して土地利用できる場所となった。宝永５年（1708）の大火後，公家町の拡張のため，丸太町北側の寺院及び町家が三条通と二条通の間の二条川東地区に移転させられた。寺町が形成されるとともに，旧居住地に由来する「新」が付く通りを形成し，町立てがなされた。既往のあぜ道，既往の水路を利用しつつ，南北に６筋の道を通し，概ね均等な街区を形成した。

享保 19 年（1734）には，二条通の北に二条新地が開発される[12]。まず新先斗町，大文字町の２町が開かれ，追って現在の川端通にあたる新生州町，東側の中川町，難波町，杉本町が町立てされ，六ヶ町となった。寛保元年（1741）「増補再板京大絵図」では，西側三筋（新生州町，新先斗町，大文字町）のみが描かれている。この三筋は現状でも地割が計画的であることがわかるのに対し，大文字町東裏手は背割りが乱れており，この後東に拡張したものと知られる。背割りが乱れた筋は，天保２年（1831）の絵図「改正京町絵図細見大成」に「のかハ」と記されており，流路があったものとみられる。二条新地開発にともない，畑地の畦道であった丸太町通も街路化していった。

幕末には，難波町及び杉本町の北側に，堀江大沢藩，長島藩の小規模な京都藩邸も置かれている。

二条新地は京都帝国大学の開校後，風紀上の観点から移転され，同地は住宅地化したものの，旧来の地割は現在もほぼ完全に残っている。

幕末の藩邸建設　京都が政治都市化した幕末には，岡崎の畑地を利用して加賀藩，阿波藩等の大規模な藩邸が建設され，岡崎村が空地のないほどに埋め尽くされた。明治初期には再び藩邸が撤去され，畑地に戻る。藩邸建設前後の絵図・地図を比較すると，白河街区由来の畦道がほぼ完全に残されていることがわかる。明らかに藩邸内を通っ

ていたはずの街路も残されており，各藩邸が旧来の道路を温存したまま建設されていた様が推察される。藩邸が仮設的な性格をもっていたことがうかがえよう。

夷川船溜近辺に造営された阿波藩邸の敷地形状は，現在も一部が残されている可能性がある。夷川船溜の南西部，冷泉通に沿う敷地裏手には石垣が積まれているが，これが阿波藩邸の敷地境とよく合致しており，藩邸建設時に積まれた石垣の可能性がある。先述した夷川船溜造営時の土盛り部の西端にもあたり，夷川船溜造営時に阿波藩邸の石垣を一部利用しつつ造成がなされた可能性が指摘できる。

（３）　近代：琵琶湖疏水と博覧会会場（図 11・12）

琵琶湖疏水の開削　明治 23 年（1890）の琵琶湖疏水の開削が岡崎中心部の地割の変更を誘発したことは言うまでもない。疏水線路のルート設定の経緯は，第５章第２節に述べられた通りである。

周辺が市街地化していく明治後期以降，琵琶湖疏水によって分断された白河街区以来の道路に部分的に変化が生じ，新たな地割を誘発した。ただし，基本的には旧来の地割の内部を細分化していく過程として理解される。

博覧会場の造成と平安神宮の造営　岡崎周辺に近代に施された地割の中で，白河街区の軸線から明らかな振れを持つのが，神宮道である。この振れが生じた原因については，博覧会場の造成と平安神宮造営の経緯の中にみいだすことができる。

明治 28 年（1895）に開催された平安遷都千百年紀念祭及び第４回内国勧業博覧会博覧会場敷地は，南，西は疏水により規定されるものの，他は概ね既存の地割を継承して設定された。二条通，広道と，明治 27 年（1894）に開通した丸太町通が敷地を限っている。

博覧会場のうち，広道より西の部分は概ね一体に計画され，平安遷都千百年紀念祭紀念殿の中心軸を基に施設が左右対称を意識して配置された。博覧会場の門のうち，西，南を縁取る疏水に面して開けられたものには橋が架けられたが，敷地内に計画された通路を延長して設定された結果，二条橋を除いて，敷地外の地割とはずれが生じた。すなわち，紀念殿の位置がまず定められ，そこに合わせて施設や門が配置された結果，周囲の地割と微妙なずれが生じたことになる。

平安遷都千百年紀念祭紀念殿は，当初，現在の動物園位置で西向きに計画されたが，南面説が有力となり，博覧会場北縁へ敷地が変更された[13]。紀念殿は，変更後の敷地においても，計画途中で微妙な位置変更がなされたことが知られている。敷地内で除去予定であった古塚が後三条天皇の御荼毘所であったことがわかり，この塚を保護するため，西に 10 間移動することとなったものである[14]。この移動寸法は，概ね，現在見られる平安神宮応天門と，神宮道が疏水を渡るところに架けられた慶流橋の東西のずれに対応する。すなわち，紀念殿は粟田門前道の軸に合わせて計画されたものの，西に移動する必要が生じた結果，粟田門前道と平安神宮の軸がずれた，ということになる。その後，明治 32 年（1899）12 月に応天門前の冷泉通から疏水慶流橋までの間の市有地が風致保存のために官有地となり，平安神宮参道として，慶流橋と応天門を結ぶ，白河街区の軸線から振れた神宮道が通された。

博覧会場周辺の道路については，一部新規開削がなされたものの，概ね旧来の道を修築して利用している[15]。

岡崎公園の形成　内国勧業博覧会終了後，直ちに岡崎の街区が新たに設定されていった。内国勧業博覧会の終了後，敷地中央に建てられていた主パビリオンである工業館が，現在の岡崎グラウンド位置に移築され，京都博覧会所有の博覧会館となった[16]。続いて，先述の通り，平安神宮応天門と粟田門前道を繋ぐ神宮道が，南北から振れた形で通された。東西には，二条通と東冷泉通が通された。明治 36 年（1903）に京都市紀念動物園が開園し，翌 37 年（1904），岡崎公園が開園した。

岡崎公園内の道路は，平安神宮の配置に規定されて，一部，周辺街区からのずれが生じているものの，基本的には白河街区以来の道路と関係づけて通されており，岡崎の文脈を継承した上で刷新されたものと評価することができる。

道路新設・拡幅　博覧会開催以降，岡崎全域が徐々に市街地化され，大正期にはほぼ全域が市街地化するが，基本的には既存の街路網の内部で市街地開発がおこなわれていった。岡崎公園以外における地割変更としては，道路の新設と拡幅，京津線の開通が挙げられる。

岡崎地区の道路は，市電開通とセットで開削・

拡幅されてきた。主要なものとして，丸太町通，東山通，三条通，神宮道，白川通の開削・拡幅がある。

丸太町通は，鴨川から熊野神社に突き当たっていたのを，明治 27 年（1894）11 月 10 日に熊野神社境内を貫き，東に延長された[17]。大正２年(1913)には，市電開通に合わせて拡幅されている。

東山通は，市電開通に合わせて開削・拡幅された道路である[18]。明治 40 年（1907）に京都市会で「道路擴築竝電氣鐵道敷設事業案」が修正可決され，建設がはじまった。大正元年（1912）から２年にかけ，三条通以南から熊野神社前まで道路拡築がなされ，市電が開通した。熊野神社以北はその後に拡築されている。岡崎近辺では，道路開削にともなう区画整理は実施されていない。

いずれの道路も，既存街区を温存したまま道路を延長ないし拡幅している。典型的な市区改正の手法である。町の表層は変化したものの，既存街区は温存され，岡崎における地割の継続性は保たれている。

京津線　京津線は，大正元年に開業した[19]。古川町から蹴上までの間は，三条通の北側の既存街区内に専用軌道を開削した。現在は一部が道路として，一部が宅地化されて，軌道痕跡を残している。古川町－蹴上間の専用軌道は昭和６年（1931）に廃止され，三条通を拡幅した上で，三条通上の併用軌道に移設された。平成９年に地下鉄東西線に乗り入れて地下化されている。

（４）　岡崎の地割の変化の特質

岡崎の地割は，白河街区以来の街区パターンを色濃く継承している。その後の変遷は，白河街区の部分的変更の積み重ねであり，総体として見ると，白河街区に規定され続けて今に至っているとみることができる。

白河街区形成以降の地割変遷を大まかにみると，次のようにとらえることができる。白河街区，六勝寺の衰退以降，中心部が農村化する一方，近世にはそこを取り囲むように都市化が進んだ。近世までの都市開発は，白河街区由来の地割を踏襲しつつ，新たな道路を通す手法でなされた。従って，白河街区の地割は，中心の農村部，周辺の都市部，あるいは両者の境において，概ね継承された。

近代の大規模開発では，白河街区を貫くように琵琶湖疏水が通され，続く遷都千百年紀年祭，第４回内国勧業博覧会は岡崎村の畑地を会場にしたため，白河街区由来の畑地の地割は多く失われた。しかしながら，都市化が進んだ周辺地区に地割と道路が残されていたため，岡崎公園内の道路と地割りは逆に周辺街区の道路を延長するように形成されていった。

つまり，都市化と農村化の繰り返しの中で，白河街区以来の地割が両者の間を調停する役割を果たしてきたということができる。

白河街区の地割が根強く残存していくのは，平安時代以来の水系と微地形とが大きな要因となっている。岡崎の土地利用を根底で規定してきたものが，水系と地形にあることが，ここでも確認される。　（清水　重敦）

註

1）『史料京都の歴史』８　左京区，1985 年，16 頁。
2）田中尚人『水系基盤による近代京都の都市形成に関する研究』（京都大学大学院博士学位請求論文，私家版，2001 年）に詳述されている。
3）『新修京都叢書』８，137-138 頁，143 頁。
4）『京都市内遺跡発掘調査報告　昭和 62 年度』京都市埋蔵文化財研究所，1988 年。
5）本図には一部において差別的表現が含まれているが，報告書という性格を配慮し，原資料のまま掲載した。
6）堀内明博「白河街区における地割とその歴史的変遷」『日本古代都市史研究』思文閣出版，2009 年，327 ～ 331 頁。
7）『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 22 年度』京都市文化市民局，2011 年。
8）田辺朔郎『琵琶湖疏水工事図譜』1891 年。
9）『平安遷都紀念祭紀事』巻下，京都市参事会，1896 年。
10）前掲註６文献。以下，以下白河街区については同書を参照した。
11）前掲註１文献。
12）「京都府下遊郭由緒」（京都府立総合資料館蔵）。
13）前掲註９ 巻上，43 ～ 44 頁。
14）稲葉信子「平安神宮の研究―建設の経緯」『日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）』1980 年，2083 ～ 2084 頁。
15）前掲註９文献。
16）『京都博覧会沿革誌』京都博覧総会，1903 年，330 ～ 331 頁。
17）『日出新聞』明治 27 年 11 月 29 日。
18）『京都市政史』１，京都市，2009 年。
19）京津線については，『京阪百年のあゆみ』（京阪電気鉄道，2011 年）。

第４節　小結

本章では，京都岡崎の文化的景観の基盤をなす自然・歴史・地理的環境を概括的に述べ，次章以降で論じる具体的事象に通底する構造の抽出を試みた。

第１節では，岡崎を形成した自然環境につき，地質・地形と植生に着目して述べた。地質的・地形的特性について分析した結果，岡崎の土地利用を呼び寄せた土台として白川扇状地の存在は欠かせないものであるが，その形成には，花折断層帯による白川の流路の決定と，砂礫供給地である花崗岩質の比叡平の地質が深く関係してきたという事実が浮かび上がってきた。さらに，花崗岩質という比叡平の貧栄養環境も影響して，東山にアカマツやコナラなどの植生が優勢したことを指摘した。これは近代における庭園植栽としてのアカマツの導入に繋がってくる。

東山の植生については人との関わりの強いマツ属の変遷に注目し，特に近代以降の森林の取り扱いと考え方についても論じた。東山にアカマツが優勢する状況は有史以降続いてきたもので，近代に入ると京都の風致上もアカマツ林であることが重視されてきた。こうした利用と保全の履歴は，京都における東山の位置づけを考えるうえでも重要な視点であろう。

同節における一連の検討は，都市化の進んだ地域である京都岡崎の文化的景観が，決して人の営みのみならず，自然環境や，さらには人と自然の関わりのなかで生み出されていったものであることを示している。

第２節では，岡崎の土地利用の変遷を通史的に整理した。本節で描き出された３つの特徴，つまり，１）京都におけるヒンターランドとしての岡崎，２）白川及び琵琶湖疏水の複合的水利用によって形成された岡崎，３）農村化と都市化の繰り返しのなかで形成された岡崎という特性は，文化的景観の価値の根幹をなすものである。

同節の通史的叙述は，各時代における土地利用の特徴を示すものでありながら，古代から現代に至るまで，この地の土地利用に一貫する特質があることも指摘している。博覧会・勧業・文教施設群の形成や南禅寺別邸群・疏水園池の成立といった近代以降の要素に関心が向きがちであるが，これらの要素も古代以来の反復的な土地利用のうえに折り重なっているものであり，この地における歴史の重層という観点を忘れてはならない。

第３節では，土地利用を規定する物理的要素である水系・地形と地割の変遷を通史的に追った。古代の白河街区の造成から近代の琵琶湖疏水開削，博覧会場造成に至る水系と地形変化の過程，そして同じく白河街区以来の地割の変化を追うなかで見えてきたのは，個別の要素の変化もさることながら，平安期に形成された水系，地形，地割の骨格が時代を越えて継承されてきた事実である。地割が平面形だけでなく水系・地形と結びついて立体的に施されたこの地では，土地利用がこの立体地割に規定されつつ展開してきた。表層土壌あるいは生態系の条件に加え，この地形・地割が岡崎の文化的景観の基層を変わらぬ骨格として支えてきたことが，ここからみえてくる。

（奈良文化財研究所景観研究室）